

トリアル・アンド・エラー
Trial & Error No.100
試 行 錯 誤



撮影/榎本 功

特集 JVCプロジェクト'90

100号を迎えて

JVCが設立された1980年の12月に生まれた Trial & Error (トライアル アンド エラー) もこの6月で100号を迎えた。原稿が集まらなくて予定の期日に発行できず、郵便局の第三種郵便係におわびの手紙を書いたり、少しでもいいものを作ろうと何回も書きなおしたのはいいが、編集者が疲れて寝こんでしまったり、それこそ試行錯誤でここまでやってきた。

発行してから1年目の、1981年12月号のプロジェクト表を見ると92名の活動者の名前が載っている。プロジェクト地はタイだけなのに今の3倍もの人がかかわっていた。2～3の例外を除いてすべて無給。心意気と体力だけは充分の、若者たちの活気に満ちていたころだ。そのころT/E(トライアル アンド エラーの略称)は日本唯一の“難民救援情報誌”を自負していた。初めて難民問題に接し、知らせたいこと、知らなければならないことが山ほどあった。10年たった今、インドシナ難民問題によりやく変化のきざしが見え、カンボジア和平や難民帰還が現実のものとして語られるようになった。

現在JVCは、アジアではタイ以外に、難民の流出国であり帰還の地であるラオス、カンボジアで、生活改善、復興のためのプロジェクトを持ち、今年はベトナムでも帰還難民の受け入れと地域協力の活動を開始する。一方アフリカでは、エチオピアからソマリアに逃れてきた難民の定住支援、エチオピアの干ばつ被災民への救援活動が進行中だ。これらアフリカでの活動を通して環境問題の解決こそが今求められていることを知った。難民問題から発したJVCも、その根本的解決を求めれば、南北問題、環境問題にぶつかり、時には政治的な力さえ必要なことを学んだのである。

難民問題の解決を求めていくうちにJVCの活動は多面的になり、もはやT/Eも“難民救援情報誌”ではなくなっている。JVCの活動の広がりにつれてT/Eの誌面も多彩になってきたのである。昨年からは編集長も交代制をとり、テーマを掘り下げるよう心がけている。これからも活動内容の変化とともにT/Eも変わっていくだろう。

最後に、歴代編集長をはじめ、これまでT/Eにかかわり育ててきたすべての方と、100号まで来られたことを喜びたいと思います。



目次

1990年の入口に立って	3	定住難民 自分たちの手で開発教育を	11
JVCプロジェクト '90	4	エチオピア 緊急援助始まる	14
タイ 変貌するバンコクと自立する村	6	ソマリア '90 12月の完了に向けて	15
ラオス 農村の自立と生活改善をめざす	7	JVCとNGOの こんな未来、あんな未来	16
ベトナム プログラム始動	8	サラワクを行く	20
カンボジア 長びく和平交渉	9	私の1日 ラオス 私は生活改善普及員	24
インドシナ難民 近づく本国帰還	10	JVC NEWS	26

1990年の入口に立って

代表 岩崎駿介

JVCは、1980年2月の設立以来ちょうど10年の年月を重ねてきたが、今年も新しい視点に立って、より活発な運動を展開して行きたい。

いま先進国に住むわれわれは、一方で南の人々を追いつめていくという南北問題を抱え、もう一方で地球を圧迫していくという地球環境問題を抱えている。しかし、多くの人は未だこの事実気づかず、今日一日の物質的安寧を続けている。また、この事実気づいたNGOを含む一部の人々も、自分の生活のあり方を組み替え、これら破壊の原因になって条件を切り崩していくまでには、十分その事実を把握しきっていない。

だが、多くの人々は日増しにおのれの生活に過敏となり、開発途上国の周辺部における正確な情報を得て、もう一度自分の生活を考え直したいと希望している。そのためにJVCを含むNGOの活動に協力して、自分の生活に広がりを持たせ、自分の生活を再考する足がかりをつかみたいと考えている。

JVCのメンバーは、この要請にしっかりと応えていかなければならない。第三世界の人々と密着して行動することによって、彼らが置かれている具体的状況を把握し、問題解決の可能性を提示していかなければならない。第三世界の生活を知れば知るほど、彼らの生活を追いつめているのは日本をはじめとする先進国の人々の物質的欲望であることを、多くの人々に告げていかなければならない。

人間的同情を示そうとして逆に非難されるという逆説を、どう説明したら良いだろうか。JVCに参加するメンバーは、周囲の人々にあくまで誠実であるとともに鋭く批判していくという両面の作業を、どのように推し進めることができるか。

☆ ☆ ☆

1990年は、このような問題意識にたって、①第三世界の中でも最も苦しい生活にあえいでいる人々、そして②その苦しさを作り出している原因が日本に住むわれわれと何らかのつながりを持ち、かつそのつながりが分かりやすい形で市民的説得力をもつもの、という二つの物差から活動内容を決定し、力を

注いでいきたい。

まず第一に、世界の孤児カンボジアの人々の生活再建。そして飢餓と内戦にあえぎ、いつも死と隣り合わせのエチオピアの人々。東西問題という矛盾の結果であるカンボジアと、環境破壊という矛盾の結果であるエチオピアに取り組み、その回復のために支援する。

第二に、第三世界の中でも「周辺」に位置するラオスの人々が、都会という「中心」に雪崩込んで自分を失うのではなく、田舎の地に留まることができるか、またカンボジアと同じように東西問題の狭間に立って、遊牧または農業という伝統的生活を失って難民となったソマリアの人たちが、自立的生活を再建できるかを模索する。

第三に、ラオス、カンボジア、ビルマという周辺3カ国を従属させて中進国への道を探るタイにおいて、スラムの子供を少しでも助けるとともに、農村部においては換金作物経済への転換を迫られる農民が、土壌を傷めない複合的農業経営をめざす動きに協力していく。

以上のこれまで続けてきた活動に加えて、今年はベトナムでも新たなプログラムを開始する。カンボジアと同じく世界の孤児となったにかかわらず決してくじけず、自立的にがんばるベトナムの人々との協力を模索する。

さらに、これはJVCが直接プログラムを持つのではないが、ビルマ（ミャンマー）とマレーシア・サラワクを代表とする熱帯林破壊の問題にも関心を持っていきたい。ビルマは環境問題としての森林破壊、人権問題としての民主化運動弾圧と少数民族の圧殺、それによって生ずる難民問題、そしてそれら諸問題の根本的原因であるビルマ現政権を支える日本の政府援助（ODA）問題という4つの問題が複雑にからんでいる。ここでわれわれとして何ができるかを模索する。また、熱帯林破壊の問題については、環境に携わる内外のNGOとのネットワークを作りながら現地の人々とかかわっていく。独りよがりなことを進めるのではなく、国際的な動きのなかからJVCとしての方向性を打ち出していきたい。

インドシナ難民

●西崎憲司記念技術学校(カオイダン)

キャンプ内の15歳以上のカンボジア難民に対し、彼らの将来(カンボジアへの帰還)の自立に役立つと思われる基礎的な技術を教える。従来の單車、自動車、一気筒エンジン、溶接、基礎電気、竹細工、漁網のコースに加え、今年度は自動車運転教習を開始し、総合的農業プログラムも計画している。

●パナニコム日本語学校

日本定住が決定し、パナニコム・キャンプに準備滞在中のインドシナ難民に対し、日本語の指導、日本の文化・習慣を紹介し、彼らの抱く不安や懸念を取り除き、日本での生活が豊かでかつ円滑に進められるよう助力する。



農村の子供たちに奨学金を手渡す

タイ

●奨学金活動

バンコク市内のスラム及び農村の小・中学生200人に奨学金を支給。また、彼らを対象とした子供会活動、キャンプ等を行う。

●クロントイ図書館

図書活動のほか、求人広告の案内、講習会など地域活動を行う。

●農村開発(ブリラム県)

多角農業、混合植林などによって食料の自給できる村づくりをめざす。

●井戸修理

JVCがタイ・カンボジア国境の村で掘った井戸の修理を行う。

JVC プロジェクト'90





ラオス

●女性生活改善普及員の養成

農村の問題を総合的にとらえ、村人とともに生活改善を進めてゆける普及員を育成する。研修科目は母子保健、栄養、育児、農業などである。

●生活改善普及活動

地方での生活改善普及員の活動を専門家派遣、財政面などで支援する。



普及員たちと打ち合わせをする

カンボジア

●サントビエップ技術学校・ワークショップ

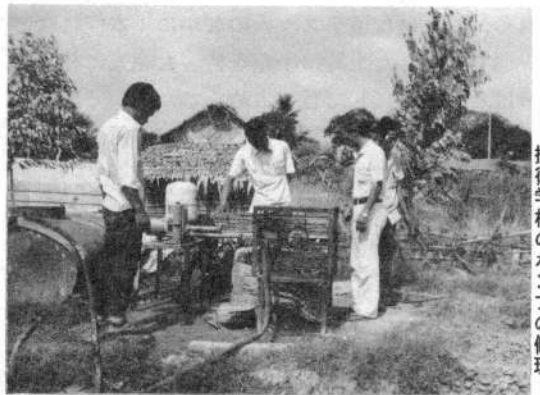
国土を復興するため、物資の国内輸送を担うトラックなどの修理を行い、同時に自動車整備士の養成を行う。また、孤児院の青少年に職業訓練の機会を提供し、彼らの自活を助ける。

●母子保健活動

母子の健康管理を目的としたRINE（経口補水、予防接種、補助栄養、保健教育）プログラムを中心に、郡病院、保健所スタッフ、村レベルの保健ワーカーの教育訓練を行う。

●井戸掘り、給水活動

本年度はOXFAM、LWSなど他のNGO、農業省水利局との共同事業で7県とプノンペン市に90本の井戸を掘る。



技術学校のポンプの修理

タイ 変貌するバンコクと自立する村

バンコクの都市化とともにスラムが立ち退きの対象になり、貧しい人々の生活が脅かされている。JVCは昨年度「子供によりよい生活を基金」を通して子供たちのためのホームを建設した。一方農村では地道な活動の努力が実り、農民の間に“自分が食べるための農業”が定着しつつある。



岩崎 美佐子

地球上のどんな街でも変わっていくのがあたりまえとしても、この数年のバンコクの変貌ぶりのすさまじさは誰しも認めるところだ。街を特徴づけていた緑と水はすっかり視界から消え、変わって豪華なビルが高さを競う。そして絶望的な交通地獄。

変わったのは街ばかりではない。乗れたいてい世間話や身の上話でいっときを共有したタクシーの運転手さんたちは、一様に無口で無愛想になった。彼らは疲れはてているのだろうか。

スラムと呼ばれている場所の特徴は、ところどころ朽ち落ちた、歩くことの困難な狭い通路を通してしか入れない、手作り住宅密集地だった。この侵入路の狭さが、車はもちろんのこと、外部からの人や物の侵入も遮断していた。水道、電気、ゴミ収集車などが入ってこないかわりに、貧しい人たちの生存を脅かすものも入ってこない。スラムは他から無視された存在であった。

しかし、バンコクの都市化とともに、都心に立地しているスラムは土地を狙われはじめる。とくに日本からの投資が集中しはじめた80年代後半、道路、高速道路、橋、港など、都市基幹の整備が行われ、空前の建設ブームが起これると地価は高騰し、大半のスラムが再開発という名のもとに立ち退きの対象になってきた。

スラムの人たちを追い出すのは簡単だ。自動車の入る、りっぱな道をスラムのなかに1本作ればいい。通りに面した土地は小金を持った商人に札束でひっぱたくようにして買い占められ、やがて裏通りまで歯が抜けるように買い占められて、気がついたら元の住人は霧散しているだろう。

1989年度、JVCはバンコク郊外に家庭不和、子供虐待、親による売春強要、親の受刑などで行き所のない子供たちのためのホームを建設した。運営にあたるのは『子供によりよい生活を基金』。いわゆる「駆け込み寺」NGOに保護された子供たちをあずかるNGOで、JVCと協力関係にある。仲よく暮らして

いる50人の子供たちの背景を聞くと、背筋が寒くなる。どの子も小さい肩に重荷を背負い、今までつぶされなかったのが不思議なくらいだ。人間という動物は未だに金と物質生活への適応には無理があるのではなかろうか。

スラムでの活動の難しさに比較すれば、農村での活動が日毎に効果をあげつつあることは私たちを勇気づける。ここまで来るまでには、担当者のコメントにはジレンマのときもあった。たった1人で村に入った新参者、村の人々との距離を埋めるには共に労働するのが一番と、一緒に汗を流してばかりいればプロジェクトが進まない。かといって村の人々の信頼を勝ち得なければ何ものも根づかない。

コメントの地道な努力が実り、まず変わったのは村の人たちの意識。自分たちが食べるための農業をする、自然とともに生きる、自分たちの培ってきた文化に誇りを持つことが定着しつつある。売るために農業をする、自然を征服する、近代文明をすぐれたものとするに取って替わって。

小学校の給食自給プロジェクトも、水田に多目的な池を掘っての複合経営農業も、薬となる草木を煎じてのサウナも、どれも積極的な村人の主導で順調だ。薬草サウナの気持ちよさをなにに例えよう。汗をかいたあとの薬草茶の美味しさも最高だ。毎日通っているばあちゃんたちがうらやましい。

今年は、草木染め手織物の奨励と市場化、米銀行運営など、婦人グループの強化、薬草樹の保護林作り、動物銀行の設置などを考えている。スタッフも1人増えて、対象とする村も、今までのブリラム県のM村を中心とする3カ村から、近隣6カ村に拡大する。また、山岳地方チャイブーン県では、住民主導の環境保護、植林プロジェクトを試みようとしている。その土地の人たちの侵入を拒否する森ではなく、土地の人たちのための生きた森林作りが可能かどうか、大きなチャレンジではある。

ラオス 農村の自立と生活改善をめざす

歴史の流れから取り残されていたようなラオスも、しだいに西側消費文明の渦に巻きこまれようとしている。JVCはこの3年間、難民を出さない国作りのための人材育成を行ってきたが、さらに、タイの農民が近代化の過程で得た経験を学ぶため、タイの農民との交流を始めた。



谷山博史

自給自足的な経済が壊されていく

今からちょうど3年前、1987年6月、ラオス政府、UNDP主催の「ラオス援助に関する円卓会議」に招待されて初めてラオスに入った時、この国は700年の歴史の流れの中の一時をまどろんでいるかのように見えた。1975年の社会主義政権成立後のラオスは、世界の歴史の流れから取り残され、ゆったりと時を刻んでいた。ヴィエンチャンの町は閑散として人も車も少なく、市場の物資も少なければ、旅行客も東欧からの少数を除いてほとんど見られなかった。サムローと呼ばれる人力車の車夫も外国人に慣れていないので、私たちに対してもラオス人並みの料金しか要求しなかったものだ。

しかしこの3年でラオスは大きく変わった。経済難を打開するため経済の自由化が急速に進められている。今まで国営公営の企業しか認められていなかったのが、製材業、輸出入業で民間企業が軒並み営業を開始した。西側先進国の商品が主にタイを通して滝のように流れこんでいる。またディスコが解禁になり、昔の歓楽街のドンパラン通りも灯を灯し始めた。

このように西側諸国の消費文明に巻き込まれていくラオスが増大する外貨の需要を満たすためには、自国の貴重な資源である木材や水力発電による電気、あるいは土地収奪的な商品であるキャッサバやメイズなどを輸出するしかない。これに伴う環境破壊、山岳民族の低地への移住、自給自足的な農村経済の海外資本への依存といった社会的変容が急激に進んでいる。

タイの農民との交流

この3年間 JVCは、農村の貧困が難民流失の大きな原因であるという認識から、難民を出さない国作りに協力するということを大きな目的としてきた。農村の生活改善をそれに携わる人材育成からと考え

て、1988年7月からラオス女性同盟と共同で「女性生活改善普及員養成プロジェクト」を始めた。このプロジェクトが女性にターゲットを当てたのは、農村の女性は家庭を支えるために、農作業、水汲み、薪集め、家畜の世話、家事、育児などの労働負担を一身に負っており、また栄養不足からくる健康上の問題も妊婦や母親及び彼らを通してその子供に最初に現れるからである。

しかし、このプロジェクトは単に農村が貧しいからその現状を改善するというだけでは全く不十分である。農村の生活への商品経済の浸透が自給自足的な生活を崩そうとしているのである。既に地方で活動する普及員の報告では、ヴィエンチャン市郊外の農村で、政府が化学肥料の使用を奨励し、購入のための資金貸し付けを銀行が始めたという。またカムアン県では、都市の小資本家が村に入り260%の利率で米を貸し与えているという。

このように、農村が自立性を失っていく過程はタイの東北地方の農民がたどってきたものとおなじである。ラオスの農民が東北タイの農民がたどってきた道を経ずに農村の自立と生活環境の改善を同時に成し遂げるためには、タイの農民との交流が何よりも効果的である。JVCはラオスの農民支援の柱として、普及員と彼らの活動地の農民をタイ農村のスタディツアーに連れていくと同時に、タイNGOの農村開発委員や農民をラオスに招く交流プログラムを開始した。この交流を通して普及員と農民は、東北タイの農民が、農業の近代化の過程で生じた環境破壊、借金の実績、若者の都市への流出等の問題にどのように対処し克服していったかを学ぶことができるだろう。逆に東北タイの農民は、かつて自給自足的であった自分たちの生活をラオスの農民の中に見出すことによって、自立した生活を再生する手掛かりを見付け出そうとしているのである。

ベトナム プログラム始動

ベトナム戦争が終ってから経済の復興が遅れ、いまだに難民を送り出しているベトナムで、新たにプログラムを始める。北部では香港からの帰還難民を対象にした職業訓練を、南部ではホーチミン市の学校や病院に対する協力支援を行う。



熊岡路矢

個人にも運不運があるように、国とか民族にもツキとか上げ潮、引き潮とかがあるような気がする。やることなすことがうまく行かず、悪いほうへ悪いほうへと流されるような時がある。1970年以後のカンボジアとか、いつからといえないくらい以前からの、ベトナムとか。

国内の復興を

北部と南部で多少雰囲気は違うが、ベトナムの町や村の人々の動きは、人口が多く稠密であることや民族性から結構せわしないという印象である。その点少し日本に似ている。ベトナムでは子供たちまで作業や物売りで忙しく働いているのだけれど、貧しい、食べるものも少ないという状態が長く続き、これからも容易には終わりそうにない。

1981年末から9カ月、シンガポールのベトナム難民キャンプで働いていた時、なぜ「死」の危険をも冒してこんなに多くのベトナム人が海に出なければならぬのかという疑問と、本国国内の経済状態などが改善されることによって、出なくてすむ人も多いのではないかという感慨をもった。

直接話をした何人かのベトナム人は、出て来たこと、家族と離れたことを明らかに後悔していた。また海賊と戦い、脊髄損傷で首から下が不随になった青年や、船の上で肉親を失い、その他恐ろしいことがあったため、ショックで口がきけなくなってしまった10歳の少女など、数多くの「海」の犠牲者をシンガポール空港から第三国に見送ることもあった。そのような経験から、出て来る「難民」とその受ける不幸を最小限にするにはどうすればいいか、それには、本国の経済的社会的復興しか解決の道は無いのではないかと考えた。

2つのプログラム

1983年頃からは、カンボジアでの活動のためベト

ナムに出入りするようになり、国内の様子がボチボチ分かるようになった。また半年ほど前から、いくつか接触していた所と関係ができ、厳しい条件のなかで行われている公的活動の一部を視察することができた。1991年度あたりから協力活動の実施を、と胸算用していたが、実際動き出してみると人々の顔や声も具体的にみえるようになり、ベトナムでの活動の開始に勢いがついた。まず最初の1年間は、既に地域のイニシアチブで行われている活動に協力参加しながら、ベトナム社会について学んでいきたい。

1990年度は、北部と南部それぞれ1カ所に拠点をもって、ベトナムでの協力活動の開始としたい。活動内容は、北と南で方向性が異なる。北部（ハノイ・ハイフォン）では、主に香港からの帰還難民を対象にした UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のプログラムで、洋裁、木工、機械、電気の職業訓練をハイフォン特別市労働局との協力で実施する。主な受益者は帰還難民であるが、限定して地域の一般の人にも機会を開放する。さらに最終的には、（難民問題の解決したあとは）地元の人のためのプログラムとして発展させていきたい。

ハイフォン市は、日本でいえば横浜や神戸、長崎のように、港町独特の明るい、外に開かれた雰囲気がある。ベトナム全体としてはまだ外に対して閉じた状況であるが、3月末訪れた時のハイフォンには、情報、もの、人が外の世界と循環しているダイナミズムがあった。

南ではホーチミン特別市の第8区（都市スラム）とビンチャン郡（農村部）の、学校、障害児のための学校、病院/保健所、職業訓練など共同体の公的活動に対して協力支援していく。先生や子供たち、お医者さん、看護婦さん、住民と知り合い、状況をよりよくつかんでいく中で、1991年度以降の方向を見つけていきたい。

カンボジア 長びく和平交渉



鈴木 由子

和平交渉の長期化とともに地方での内戦が激化し、国内避難民が出てきた。難民の本国帰還もいまだに計画段階で動き出してはいない。JVCはタイ、カンボジアで活動する他のNGOとともにカンボジア和平のための緊急アピールを行った。これからも和平実現に向けて日本政府に積極的に働きかけていく。

苦しくなった人々の生活

乾期のカンボジアにはめずらしく一時的な強い雨が降った3月初旬の朝。「この時期の雨は、暑くなる前ぶれです」と現地ドライバーのSさんが話してくれた。11年前ボル・ポトが去ったこの地に同じように雨が降り、カンボジアの人たちは、それぞれ陽気の移り変わりを感じとっていたに違いない。

「カンボジア問題」も1987年末以来、和平実現に向けて着実に移り変わりをみせてきた。89年8月には国連の実情調査団が現地入りし、人々は平和への気運を感じとっていた。しかし、同年8月のパリの国際会議では、和平交渉における紛争当事者間の折り合いはつかず、国際監視機構の成立が見送られたまま、9月にベトナム軍がカンボジアから撤退した。その後、地方での戦闘の激化が伝えられ、今も多くの国内避難民が出ている。実際に平和を手にするためには、まだまだいくつかの課題が残されている。

このような情勢の中で、都市部のマーケットにでまわる物資は豊富になり、ホテル、食堂などの新改築、映画館、ダンスホールの増設で華やかさは留まるところを知らない。タイやシンガポールと貿易している商人や、噂ではあるが私腹をこやす高級官僚、党幹部らに富が偏在し、大半の人々の生活は年々苦しくなっている。さらに、国内の防衛にかかる費用と人は財政を圧迫し、公共サービスでの人材・財源不足につながり深刻な問題となっている。

カンボジアの人々が抱える苦悩は国内だけではなく。タイ・カンボジア国境には今も40万人の難民が閉じ込められている。和平実現に伴う本国帰還はまだ計画段階で、動きだしてはいない。

カンボジア緊急アピール

1985年から開始したJVCのカンボジア国内での活動も多くの団体や個人支援者に支えられ、5年目を迎えようとしている。現地での実績を重ねている技

術訓練、母子保健、井戸掘り・給水のプロプログラムは新しい展開を見せている。技術訓練は馬清さんをはじめ現地講師を迎え新しい訓練コースのシステム化を、母子保健では現地活動2年目の杉江美子さんによる人材育成の向上を、井戸掘り・給水はOXFAM・LWS・JVCの3つのNGOと農業省水利局が協力し今年90本の井戸を掘ることを目標としている。

さらにタイ側とカンボジア国内の両サイドで活動する数少ない団体の1つとしてJVCが帰還実現に至るまでに果たす役割は大きい。90年4月17日、その数少ない団体であるMSF(フランス)、HI(フランス)、IRC(アメリカ)、JVC(日本)が、「カンボジア人のための緊急声明」を提唱し、ベルギー、オーストラリア、香港を含む6カ国で同時記者発表を行った。一刻も早くカンボジアに平和がもたらされるよう両サイドの団体が協力し国際社会に訴えかけたアピールに、今EC加盟17カ国が国連におけるカンボジアの議席について態度を変え始めている。これには、86年にカンボジア国内で活動しているいくつかのNGOと関係諸団体により結成されたNGOフォーラムの働きも大きい。90年2月に行われたブリュッセルでの会議にはJVCから小野豪大さんが出席し、アジア太平洋地域グループの一員として、各国政府にカンボジア和平の実現への具体的呼びかけを行うことに同意した。

和平が実現すれば、荒廃した土地も耕され、ふたたび豊かな田園風景がカンボジア国土を埋めつくす。カンボジアの人々が思い浮かべる母国の情景が実際に目の前に広がるのだ。しかしODAなど多くの開発事業がいきに入り込んだ時、再びカンボジアの苦悩が始まるのかもしれない。これだけ傷めつけられた人々が2度と同じようなめに合って欲しくない。今は、彼らの望む穏やかな日々が来ることを願いながら、今後の動きを見守っていきたい。

インドシナ難民 近づく本国帰還

難民帰還が現実的となり、NGO各団体は職業訓練プログラムを帰還後の自立を考慮したものに切りかえている。しかし、国連とNGOが一体となった包括的な職業訓練計画は、避難民キャンプが三派連合政府の支配下にあり、難民を中立キャンプに移動させることができず、いまだに実施されていない。



清水俊弘

ここ1、2年大規模な本国帰還が続いているラオス難民に加え、カンボジア、ベトナム難民に対しても本国帰還がタイ政府の主対策になってきた。それに対して国連は、難民の帰還は彼らの自主性に任せるべきで、強制的に行うべきではないと主張し、タイ政府を牽制している。一方、NGO各団体も難民の帰還後の自立を考慮した職業訓練プログラムを推進している。カンボジア国境もその例である。

タイ・カンボジア国境には、2種類の難民が存在する。1つは、1979年のタイ国流入組を中心に運よく難民認定を受けた人々、もう1つは、ベトナム軍の大攻勢を受けるまで国境カンボジア側に踏みとどまり、結局ボル・ポト、シハヌーク、ソン・サンの三派連合政府に取り込まれてしまった人々である。現地では、前者を難民 (Refugee) と呼ぶのに対し、後者を避難民 (Displaced Person) と呼ぶ。

難民は、UNHCRの保護のもと安全性と政治的自立性が保証されるうえさらに、本国帰還、一次庇護国での同化定着、第三国定住の3つの基本解決策の検討対象になる。他方、避難民には国連の特設機関であるUNBRO (国連国境救援機関) が食糧と必要最低限の日用品を配給するだけで何の保証も無い。彼らは、難民ではなく三派連合政府の国民であるからだ。そしてほとんど事情もわからないままカンボジアの現政権に対するゲリラ活動を強いられている。特にボル・ポト派のキャンプでは、いまだに拷問、虐殺の圧政が続いているという。

この、カンボジア国境に国連とNGOが一体となった難民の包括的職業訓練計画が提案された。それは、国境最大の中立難民キャンプであるカオイダンを中軸とし、他の避難民キャンプ (総人口25万) の稼働年齢層6万人を巻き込んだ職業訓練の実施案である。具体的には、カオイダンにある職業訓練施設を利用し、各避難民キャンプから受益者を集め、インストラクターレベルの訓練を施す。そして、訓練

終了後、それぞれのキャンプに戻り、教わった技術をフィードバックするというもの。JVCの運営する技術学校は、カオイダンの中でも最も規模の大きいプログラムの一つで、他のキャンプからの就学希望者も受け入れ可能である。したがって、この計画を進めていく上で、非常に重要な役割を担うことになる。実際、比較的国境に近く戦闘の影響をうける恐れのあるバン・タットというキャンプから300人の生徒 (その家族も含めると約1000人の移動になる) を受け入れ、結局それがキャンプの閉鎖につながり、3000人の難民を安全なカオイダンに統合するきっかけになったこともある。

しかし、カオイダンとバン・タット以外の7つの避難民キャンプは、三派連合政府に属しているため、その統制を無視して中立キャンプに移動させることができず、この構想にブレーキをかけている。

ところで、ラオス、カンボジア難民の第三国定住が先細りしている今、パナニコム・トランジット・センターの過半数を占めるのは、ベトナムのポートピープル約1万5000人である。彼らに対して、現在難民認定審査 (スクリーニング) が行われているが、その大半は経済難民として退けられ、本国帰還を強いられることになるだろう。ベトナム難民については、パナニコムから約200人が日本に受け入れられる予定である。

いずれにしても難民の大規模な本国帰還は近い。10年間、政治に翻弄されながらも国際機関の庇護を受けてきた彼らと、その陰で世論から見放され続けてきた残留の民、その二者が、本国帰還により再び一つになる。今、我々が考えなければならないのは、帰還難民の庇護ではなく地域住民も巻き込んだ包括的な復興プロジェクトである。国境の両側で活動するJVCとしては、状況を適切に捉え臨機応変に対処したいと考えている。

定住難民 自分たちの手で開発教育を



小野 豪大

従来の日本人ボランティアによる家庭訪問活動に加え、定住難民自身による開発教育が始まった。彼らの文化や体験を話し、さらに日本社会の閉鎖性を指摘する。彼らの存在自体が開発教育の教材となっている。

1989年、「偽装難民」騒ぎの顛末^{てん}

日本における難民のイメージはあまりよいものではない。「難」という漢字がよくないのかも知れないが、昨年はこの「難民」という暗い感じのすることばにさらに忌まわしい形容詞が付いて、ちょっとした騒ぎになった。「偽装難民」がそれだ。

「偽装」というと「偽装結婚」とか「偽装殺人」という尋常ではない事態を勝手に連想してしまい、ことば自体に心理的抵抗を感じる。「偽装」+「難民」=「偽装難民」。中国から貧困を逃れてやってきた人たちに対して、マスコミはその強大なメディアの力をもって、否定的なレッテルを張り付けた。多くの日本人はマスコミの受け売りで、短絡的に「難民」=NOの態度をはっきりと表明した。その結果、既に日本で幸せに生活していたベトナム人女性への嫌がらせにまで飛火したという報告もある。

1989年度のポートピープルは3498人で、日本政府はそのうち2804人が中国国籍者であると発表している(1990年4月現在)。結局、貧困の打開策を日本に求めた彼らは不法入国者として強制送還された(これまで792人が送り返されている)。多くの日本人が彼らに対して否定的な感情を抱いている中で、彼らの直面している貧困と私たちの豊かさとの表裏一体を成していることを意識化した人々は、果たしてどれほどいるだろうか。

定住難民は日本人の意識を変えられるか

いきなり「偽装難民」騒ぎのおさらいから始めてみたが、豊かさに目隠しされた日本人の自己本位性(排他性)はまだ根強くはびこっているようだ。

そこで内側にいる人たちが日本人に揺さぶりをかけていこうとする動きに、定住難民自身による開発教育プログラムがある。

学校訪問・講演会で母国の文化や体験を語る、イベントで伝統舞踊・音楽・料理を紹介する、あるいは

はさらに踏み込んで日本人の閉鎖性を指摘する。この10数年の間に来日した定住難民は、日本語によるコミュニケーション能力を蓄え、自分自身をサカナにしながら日本人の目を覚ますために様々な手法で活動し始めている。それは自分自身の生活環境をよりよくするためであり、また第三世界で起っている様々な構造的矛盾の解決へもつながっていく。

開発教育は英語で、Development Education といわれ、包(envelope)から取り出す(de-)、つまり潜在的な能力を外に出してやるための教育をいう。私たちはふだん開発教育という時、第三世界との関わりをテーマとしているが、その意味において定住難民は自らの存在を「生きた教材」として私たちに提供してくれているのである。

定住難民プロジェクトの展開

昨年の定住難民プロジェクトは、従来からの家庭訪問による日本語学習・相談活動を継続する一方で、定住難民自身がその民族性を維持・継承するためのことばや伝統舞踊の教室を支援し、開発教育プログラムも学校訪問・イベント開催を通して非常に活発に行われた。つまり定住して間もない人たちが会える適応のためのニーズから、日本生活のある程度慣れた人たちが抱える文化のニーズまで対応しながら、彼らを取り巻く環境側である日本人に対して開発教育プログラムを行うというわけだ。

日本政府は今後3年以内に東南アジア周辺の難民キャンプからベトナム人1000人を受け入れることを表明している。またJVCでも今年度よりベトナム国内において復興協力プロジェクトを開始する。これでJVCはインドシナ三国(ラオス・カンボジア・ベトナム)各国内において関わりを持つことになる。

このような動向の中で、定住難民プロジェクトは各国内のプロジェクトとの有機的なつながりを保ちながら、より多面的な活動展開が期待されるだろう。

エチオピア

●総合的復興計画（マーシャ）

破壊された生態系の回復，生活改善によって飢えることのない村づくりをめざす。

(1) 農業・保健教育

母親学校で学んだ生活改善の方法を，受講した母親たちが家庭訪問活動によって村人に伝える。

(2) 植林

木々の失われた山間部の斜面，家のまわりなどにユーカリ，アカシアなどを植える。

(3) 土壌保全

表土が流されやすい山の斜面に石垣を築き，谷の浸食を防ぐため川底に石を敷く。

(4) 給水・わき水の保護

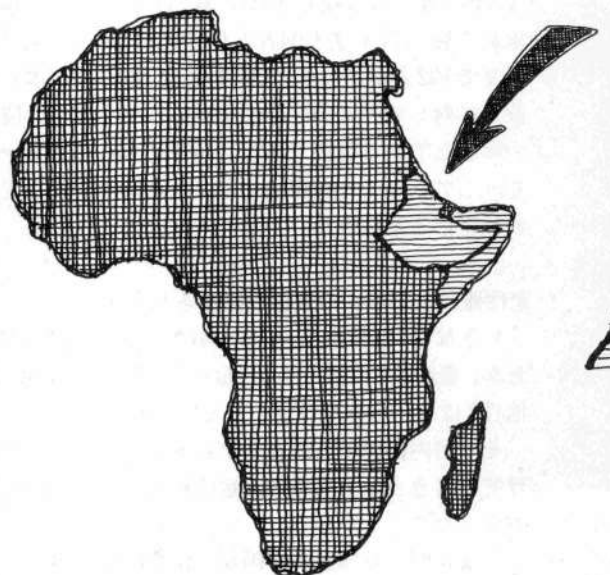
家畜の糞尿などで汚れないため，わき水のまわりを覆う。

植林も女たちの仕事



●ビチェナ緊急救援

東ゴジャム州，青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む2万5000人の干ばつ被災者に対して①フード・フォー・ワークによる食糧配給，泉の保護，環境保全，支道建設，②保健衛生教育と診療所への支援を行う。





農民とのミーティング



満開の玉ねぎ畑

ソマリア

●農業による難民の自立促進

(1) 農場

3 地区合わせて約426haが完成し、500 家族以上が入植した。地力の維持のため、家畜の糞を利用した有機肥料、チッ素を固定する豆科の植林を奨励している。

(2) 植林

農場内のほか、居住地などにパパイア、バナナ、レモン、ルシナなどを植えている。

(3) ワークショップ

かんがいに必要なポンプの保守整備のために農民や地元民を技術指導している。

(4) その他

農作物の運搬や収入向上のために、ロバ車をローンで提供している。



ロバ車でメイズを運ぶ

エチオピア 緊急援助始まる



林 達雄

エチオピアの内戦によりマーシャ村での活動は中断せざるを得なくなった。一方、内戦に加えた干ばつで飢餓の再来が心配されている。JVCは青ナイル沿いの東ゴジヤム州で緊急援助を開始することを決めた。

マーシャ村活動の中断

紅海をにらむ戦略的要所エチオピアは国際政治の中に翻ろうされている。現政権とエリトリア・チグレ解放戦線との間の内戦は、ソ連の軍事援助撤退を契機に激化し、1989年10月にはウォロ州もほぼ全域にわたって解放戦線の支配下となった。マーシャ村での活動も戦争のために中断せざるを得なくなったわけである。無念！

過去3年半の間に116万本の植林、150haの土壌保全、20カ所以上の泉の保護、その他診療所の改修や、役牛、種牛、農具の貸出や配給を行ってきた。だがこうした物理的成果以上に、村人の意識変革への試みが私たちの実績だと自負している。最初20名の母親とともに始めた料理教室は、習った女性自身が他の村人に教えることにより、89年までには3500人の村人をまきこみ、植林や水の確保等、分野を越えて広がっている。日々、水や燃料を運び、土に触れてきた女性たちからの出発である。また人から人へというマーシャの歩みは、植林・男女の関係等をテーマにした劇を取り入れることにより、子供や農民たちの間に浸透しつつあった。

環境破壊（森林伐採）の行きつく先にエチオピアの「飢え」がある。そうした意味で、エチオピアの村のあり方は、地球の未来を占う試金石ともいえよう。東ゴジヤムでの救援活動を行いつつも、スタッフ一同マーシャ村の再開に日々備えている。

新プロジェクトの発進

1989年、内戦に加えて干ばつが再来しており、このまま放置すれば84、85年の飢饉を上回る被害が出る恐れがある。JVCでは90年2月、スーダン（解放戦線側）、エチオピア現政権側双方の調査を行い、援助の手の入っていない東ゴジヤム州で救援活動を行うことを決定した。

JVCにとって、エチオピアで3回目の救援活動で

ある。85年以来活動を担ってきた10名のエチオピア人スタッフは、3月には現地入りし、村々の調査を開始した。JVCエチオピア代表となった山田氏、農業技術者の江原夫妻、若い栄養士田尻さん、3月に参加した寿賀調整員。日本人スタッフも一丸となって準備を進めている。

東ゴジヤム州はテーブル台地の上の平らな高地（海拔2500m前後）と青ナイル川峡谷沿いの低地斜面（海拔1000m～2000m）の2つの地域からなるが、前者がアディスアベバの穀倉といわれる豊かな土地であるのに、後者は干ばつに見舞われやすいやせた土地である。後者には車の通れる道もなく、情報も閉ざされている。すなわち飢饉がおきても、台地の上の人にすらあまり知られぬまま進行してしまう。一時帰国中の寿賀君の話によると、84年大干ばつ以降も雨量の少ない年が続き、木の根をかじり、家畜を売ってしのいできたが、もう家畜も売りつくしてしまい、今回の干ばつはしのげそうもないという。

JVCでは食糧配給のための登録をすでに済ませ、5月末には第一回目の食糧配給を行う。同時にマーシャ村で行ってきたような保健・栄養の教育活動を行う予定である。始動期にお金がかかるのが救援活動の常だが、新聞アピールの結果、5月17日現在で750万円の支援金が集まっている。謝辞。



ソマリア '90 12月の完了に向けて

UNHCRが中心となり難民援助は終息に向かっている。
JVCの対象者のほとんどはソマリアに定住することを希望した。農業による経済的自立もほぼ達成されたといえよう。12月のプロジェクト完了までにポンプの保守技術のトレーニングと、植林への理解を広げたい。



鴫 田 三 芳

難民の意志

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が中心となり、難民援助の終息に向けて、一連の活動が進んでいる。手始めとして、エチオピア領内に帰る難民とソマリア国内に定住する者とを選り分けるために、今年3月までに難民の再登録を終了した。

関係者の予想に反し、70%弱がソマリアへの定住を希望したのである。多分、ソマリアとエチオピアとの政府関係は一応修復したとはいえ、難民が故郷に戻るのを拒む状況が未だに現場レベルに存在するためであろう。また、多くの難民は一般のソマリア人と同じ民族であり、宗教や生活習慣も近いことも今回の結果に影響していると言えよう。

JVCの対象者（農業を営んでいる難民）は90%以上の者がソマリア国内での定住を選択した。これは、従来からわれわれが気掛かりであった「本当に彼らは農業で食っていくつもりなのか」という問いに対する、重要な回答になった。

混乱続く社会情勢

ソマリアの社会情勢は、改善される兆しが無い。1988年5月末、ソマリア北部で反政府勢力が蜂起して以来、利権絡みの部族衝突が続いている。長く大統領として君臨してきたシヤド・バレの権力も衰退の一途である。

また、経済状態も悪化の一途である。工業製品のほとんどと食料品の一部を輸入に頼り、家畜やバナナなどしか輸出できないため、貿易赤字が累積し、外貨との交換レートは過去2年間ほどで10分の1に下落し、インフレは話にならないほどである。

爆発的なインフレへの対策なのであろうか、昨年末から、一般の銀行にはソマリアの通貨の在庫がなく、中央銀行だけが通貨を供給している。

農業による自立

JVCの受益者の定住意志が確認できても、実際彼らが自立できなければ、目的は達成されない。

今年3月の時点で彼らの自立状況を調べた。一番初めに着手したマガネイ地区では5カ所中1カ所が、次に始めたハルバ地区で大半が既に援助がなくても農作物の収穫だけで自立が可能になった。昨年度から農場建設を始めたジャララクシ地区では、期間が短いため、自立状況が未だ明確ではない。

自立の意志が強く生計が成り立つ難民の多くは、長く住み慣れた難民キャンプを出て、農場の周囲に移住している。もっとも遠いグループでは難民キャンプから30km以上も離れた所に移っている。

残された課題

農業による経済的な自立がほぼ達成されつつあるとはいえ、長期的な自活を目指すためには、まだまだ取り組まなければならない点がある。

第一には、ポンプの長期維持である。それには、農民や地元の機械修理工がポンプの理解と保守技術を向上するのが不可欠である。4、5年前に比べ、故障が大分減り、農民たちのポンプ使用が注意深くなったことは進歩である。また、若者たちが率先して父親たちにポンプの点検法などを教えるようになってきている。ただ、新しい農場ではまだ経験が浅く、そのトレーニングが必要である。

第二は農場での植林。長年これにも力を入れている。ただ、何度苗を配ってもすぐ枯らしている農場もあるので、植林への理解をさらに広げたい。

既に、ポンプのオイルやディーゼルは農民が町で購入している。難民が、援助なしで、地元の農民として地元民とうまく連携し合い、自立してゆく姿を今年の終わりには見られることを願っている。

●すぐる10年、来たる10年。初心忘るべからず。主権国家からなる国際システムが崩壊しつつあるのは確かなことです。来たるべき地球社会システムでは、この惑星の住民にとっての最適単位が、これまでのように不可分ではなく、時により、問題により、重層的に、融通無化に変化するでしょう。NGOは、その時、重要な主役です。地球的に考え、地域的に行動するのも良し、地域的に考え、地球的に行動するのも良し。要は、日本も日本以外もよくなること。

(執行委員 多賀秀敏)

●T/Eが「創刊100号」と聞いて、感慨を新たにしました。今でも創刊号を手にした時の感激は忘れない。発行に際してももちろん反対の意見もあった。写真など掲載するのはぜいたくだ、との指摘もあったし、活字を組むのさえぜいたくだと言われ、とうとう5号は手書きにしてみました。あれから10年。本職のジャーナリストになった者もいるし、ぼくのように難民・援助関係の仕事で食っていくことになった者もいる。

「JVCは若い」とよく言われる。しかし、これは良いことである。常に新鮮な気持ちを持った者が集まり、難民のニーズと地球の変化に応じて、人々とともに歩んできた結果である。日本のNGOにテキストは無い。灼熱の太陽の下から上がってくる「声」の中に真理があることを忘れないで欲しい。近い将来、どこか同じ現場で働くことが出来ればと願っている。

(UNHCR スリランカ事務所 税田芳三)

●先頃、日本に定住した難民少女の医師国家試験合格のニュース報道がありました。私たちにも大きな励みとなった記事でしたが、日本がインドシナ難民を受け入れて10年以上たつのに、あれほど注目を集めてしまうほどまだ珍しい例である、という現実にはちょっと残念な気がします。

意欲にあふれたインドシナの青年たちが、才能を伸ばす機会に恵まれずに夢を捨ててゆく現状がまだ続いています。彼女のニュースが特別な例として終わらないように、その環境を少しずつ変えてゆきたいですね。

(JVC 神奈川ボランティア 関葉子)

●JVCは海外協力の活動をする人の集まりだけど、その根は新しい価値観の創造にあると思う。第三世界とつながるということは、異なる文化や習慣、生

JVCとNGOの

こんな未来、

活を大切にしよう関係作りをすること。

日本の社会は型が好き。だけどJVCは型がないという型を作った。JVCが大きくなりつつある今、異なった考え、色を持った他のたくさんのNGOが雨後のタケノコのように顔を出してきたら楽しいだろう。それぞれがつながり合いながら、常に型を壊し、新しい型を作っていく、そんなダイナミックな活動を目指したい。

(栄養士 浜野敏子)

●86年の暮れ、はじめてJVCのマーシャ村のキャンプ入りした時の思い出は今なお鮮烈である。ランプの光の下、チェックダムの件で激しい議論をたたかわしていた内山田君や久田君の事。対症療法的医療協力では不十分だと植林業務に精励していた林医師の思い出。そこには住民と痛みをわかち合う愛情と、困難に正面から挑戦する熱気が溢れていた。私にとっても人生の回心の転機でもあった。JVCもこの原点だけは持ち続けてもらいたい。

(執行委員 秋山忠正)

●米ソを主軸とした東西冷戦の長い時代が終わり、人類はようやく世界的戦争の悪夢から解放されようとしています。そして、これまで隠されていた“最大のテーマ”である、南の民衆の苦難という問題が改めて人類の課題として浮かび上がってくるでしょう。その解決が、国家や企業の、自らの有利さやシステムを決して捨てない形での関わり方ではもはや不可能である以上、NGOの果たす役割は自分たちが考える以上に大きいはずです。

“北”の人間である日本人の生き方、意識をどう

あんな未来

JVCを支える22人の声

変えるか、それがまた南の民衆の苦難を小さくすることと無縁ではないことを考えるならば、いまだし「開発教育」にも力を注ぐことが、今後10年のJVCの課題のひとつだろうと思います。

(執行委員 岡本厚)

●10年前、今西錦司氏が“現代の科学は合理性を追いすぎ疲れている、リクリエーションが必要”と話すのを聞いた。JVCの精神もこれに通じるのではなかろうか。言い換えれば、経済論理を求めるのではなく、“いのち豊かな地球”を求める運動。90年代にNGOの果たすべき役割は大きい。援助は小さく、運動は大きく…10年後、小学生の子供たちと一緒に、着実に小さな実をつけたJVCの現場をめぐるのが楽しみだ。

(元エチオピア・スタッフ 安村妙)

●「まず知って下さい、そして考えて下さい」

これは講演会などで、「では具体的に日本で何ができますか。どう協力できますか」という参加者からの質問に対しての答です。「自分たちの生きている身近な地域の問題から始めよう」と言っても、もうひとつJVCの現場とつながるという実感が得られない。また、いろいろ制約のある日常生活の中から事を始めるというのも容易ではない。いっそ「お金を下さい」と言ってしまった方が簡単だが、これでは片手落ちになってしまう。

……そこでJVCは、次の10年は「国内でのMO-TIVATORの役割を担う」ことを模索しようではないか。それは現場においてよりよい仕事をする際にも、1つの基本的な要素になるだろう。

(元タイ、ソマリア・スタッフ 嶋紀晶)

●いろんな国の現場でその地域の人々の中に入り込み、人々とともにプロジェクトを作り上げているJVCだからこそ、もっと日本の国内においても各地方の地域の人たちと、自分たちの活動を分かち合っ

(元ソマリア・スタッフ 嶋美)

●姪がスペインのベンボスタから帰ってきた。学校と折り合えなかったのではなく、サーカスがやりたくて、5年生を終えるとすぐその子ども共和国に旅立ったのが1年前だった。

その子が日本の中学には行けないという。子供の人権を無視し、管理を強めて秩序を保とうとする今の学校を見れば、強いて彼女をそこに行かせることはできないと思う。いつになれば、ピアスをし、3個の指輪をキラキラさせた12歳の少女が、そのままの姿で生きて行ける社会に行きつけるのだろうか。(定住難民プロジェクト・ボランティア 今村年伸)

●読売新聞で寄宿舎が見つからない、苦悩のインドネシア留学生の記事を読み、貧しい心の日本が悲しくなります。何とかこういう学生のために頑張っただけでないでしょうか。

私は79才の年金おばあちゃん。何時も貧者の一燈だけを献げている者ですが、でもみんなでその気になれば、出来ない事はないでしょう。実現を祈ります。(千葉県富津市 工藤つえ)

●私は長崎在住で、東京から遠く離れているため、何のお手伝いも出来なくて申し訳なく思っています。傍から見ているのではなく、この仕事(ボランティア)に取り組みたいと、いつも心に感じています。自分の回りでも何か出来ないかと考えているのですが、勉強不足もあり友達を説得する力もありません。地方での勉強会など、できないでしょうか。何年前のアフリカでの大飢饉の時から思いが、だんだん大きくなっています。一生の自分の仕事だと思っています。

私たちが食べている時に、あたりまえに食べている時に、食べる物が無い人がいる。とても悲しいです。人間の最低限度の行動、食を満たしてあげたいです。働くためには、食べなければいけません。

(長崎市 中ノ瀬由紀子)



◀ 村の助産婦さんたちと
(カンボジア)

これからラオス料理を作ります▼
(ラオス)

〔現場から〕

●「あなたは給与をいくらもらっていますか？」とカンボジア人に聞かれることがある。すんなりと答えられない。カンボジア人の収入はあまりにも少ない。日本人だから日本人並にもらって当然かもしれない。しかし、彼らは私たちを本当にどう見ているのだろう。貧富の較差が特に目につくようになったこの頃、一番知りたいことである。日本人としてどのように異国の社会に「参加」できるか、それはNGOで働く者の永遠の課題かもしれない。

(カンボジア代表 古西勇)

●本を読んでいると明りが消えた。今夜も停電だ。内戦と“東”の援助削減による深刻な燃料不足と発電所も故障が多いらしい。日常生活の中にも、こうしてこの国の状況が投映されている。人々は文句を言うでもなく、石油ランプを点し、お金持ちは小型発電機（日本製が多い）を回す。

悪夢のポルポト時代以後のこの11年間も、人々は耐え、生き延びてきたのだ。“夜明け”が近いことを祈るとともに、“ぜいたく”に馴れてしまったわが身を思う。

(カンボジア・スタッフ 本橋栄)

●未来っていうのは、なかなかどうして良い言葉ではないですか。“未だ来てない”けど、“これから来る”ってことで、未だ見ぬ新しいものに会えるかもしれないっていうことですよ。そして未来っていうのは、金持ちにも、ビンボー人にも、ちびにも、デブにも、平等に訪れる可能性のあるものですね。さらにいうと、未来っていうのは1つだけじゃない。あんな事もこんな事も起きるかもしれないってこと



で、その“かもしれない”っていう可能性を信じて、私たちはあれこれ手を尽くしてみるわけなんです。

(ラオス・スタッフ 北詰秋乃)

●日本に一時帰国していて一番強く感じるのは、息苦しさだ。成田空港で、電車の中で、東京という街で。緑はなく、動物もいず、能面のような顔の並んだ重苦しい街。「ほんとは何がやりたいの？」道ゆく人に思わず叫んでみたくなる。

エチオピアでは、生活の「豊かさ」が実感できる。土との、水との、空気との、緑との、動物との、そして人間との対話。そこには無数の対話がある。「豊かさ」とは、自分をとり巻く全てのものとの対等な対話の中にこそあるものだ。それが「新しい生き方の出発点」。対話を続けるため、「豊かさ」を守るため、私はまたエチオピアに戻る。

(エチオピア・スタッフ 壽賀一仁)

●JVCソマリアのプロジェクトは1983年に始めて以来、良い意味でも悪い意味でもJVCの歴史の変遷の1つの流れをたどってきたと思う。が、根本の見直しの末、本年度で収束する。厳しい状況にある地元民をさしおいて難民を長期に援助すること、外

国の近代技術であるポンプに依拠することなどへの反省からだ。こういった、立っている足元をよく見つけて、小回りがきくことがJVCの強みだと思う。

それにしても、よくまあこんな国で活動を始めたものだと感嘆する。文字通り異文化との出会い。自分の内部変革を余儀なくさせられる。それが出来ない、否定して去るのみ。問われているのは常に自分自身だと思い知らされる。それが面白くて活動を続けているのかもしれない……。

(ソマリア代表 礎田厚子)

●私がJVCに加わって7年がたった。この間の活動は、難民が自立に向けて立ち上がることを勇気づけるものであったと思う。世界的な規模の人道的援助は、彼らの将来の基盤を作る上で確実に役立ってきた。JVCも多くの金と人材を投入してきたが、その経験の中から、今、最少限の資金投入により、逆に受益者の自助を促し、より多くの実りを得ることを目指す方向に変わってきた。この考え方がとても大事だと自分でも考えるようになった。

最後に、自力だけではやってゆけない兄弟たちを支援し、支えて下さっている多くのドナーの皆さんに感謝したい。

(ソマリア・スタッフ シアッド・モハメット・マール)

●JVCの活動は難民援助から始まり、地域・農村開発にも広がってきた。難民への援助は終わりがなく、したがって無力感と疲労のみを感じて、「とにかく休みたい」と去っていった人も多い。

活動が農村開発まで広がった過程で、スタッフの間にこういう活動に興味のある人が以外に多いことを知った。そこで今の私の夢は、タイの農村にJVC OB/OG とスタッフのための共有地を持ち、農業を営むことである。それぞれの家族が自分たちの食べるものを作り、農業をしない人はその分を支払い、利益は共有し分かち合いたい。そして、ここを意見交換と休息の場としたい。

(タイ代表 ポンピモン・チャイブーン)

●JVCのような団体はこれからますます必要となると思うので、10年先もぜひタイにいてほしい。まだまだ知られていないが助けを必要としている地域が多いからだ。

JVCの方針に関しては、プロジェクトを行うか否



かに少々慎重すぎると思う。なるべく積極的に活動に取り組んでいきたいのに、考えすぎて行わない場合が多いと思う。

また、JVCタイは今後財団化することが望ましい。そうすることでタイ社会に認められ、政府からもサポートが得られ、もっと良い仕事ができると思う。なお、私は今まで7年間JVCに関わってきたが、この仕事に大変満足している。

(タイ・スタッフ カモン・ミンムアン)

●試行錯誤の10年がそうであったように、JVCの今後の10年もダイナミックな活動が展開されるであろう。そこで大切な位置を占めるのは、第三世界の人々であると思う。特に地球環境、精神の豊かさ、そして人類の真の進化に関して、彼らから学ぶべきことは多い。

そして、それらを柔軟な感受性で受けとめ、独自に何らかの具体的な行動に移していく市民が必要だ。「日本一億総NGO参加の時代」になればいいと思う。NGO自体も、しっかりとしたポリシーを持って、しなやかに政治の世界に切りこんでいくようになりたい。

(タイ・スタッフ 大石道子)

●カンボジア難民たちの帰る日が、ひたひたと押し迫ってきた。「帰還」という言葉を耳にする時、彼らは決まって「もうその話はやめてくれ」と言う。望んで帰る人などまぎらないのだ。

まちがいなく、仕方なしに帰って行くだらう彼らの、本国での社会復帰を考えると不安である。第三国定住に命を賭けて脱出して来た人も、カンボジアに帰れば単なる一度逃げた者になる。心の傷はたやすく癒えないだろうが、やけっぱちにならぬよう、希望を失なってへこたれぬよう、この本国帰還が正解であるように、JVCはまだ、難民問題を捨てるべきではない。

(タイ・スタッフ 井本勝幸)



サラワクを行く 熱帯林を訪ねて

岩崎 美佐子

1990年4月29日から5月11日まで、マレーシアのサラワクで現在もっとも伐採が激しく行われている東部バラム川流域に、ブナン人の村とカン人（カンヤン）の村を訪問した。一行は、JATAN（熱帯林行動ネットワーク）の黒田洋一、日弁連弁護士の大西裕子、林良二、薦田哲、ウータン・森と人をつめる会の西岡良夫、日本電波ニュースの島直紀、毎日新聞福岡総局の春日孝之、そしてJVCの林達雄、岩崎美佐子の9人だった。

サラワクへ

飛行機が遅れ、シンガポールについたのは夜中の2時を過ぎていた。6時間以上待ち時間があるのだから、ホテルを無料で用意して欲しいと林（達雄）さんが航空会社と交渉すること1時間余り。黒田さんと私はぼんやり坐って待っているだけだ。「さすがJVCの交渉力。粘り強いなあ」と黒田さんが感心する。とうとう林さんが粘り勝って、私たちはホテルに泊まれることになった。嬉しいシャワーを浴びてビールで乾杯したら午前5時。7時半には出発だ。

サラワクの州都クチンに近づくと、眼下はさすがに緑一色。しかしよく見ると原生林は見当たらない。全部二次林やプランテーションばかりだ。飛行機を乗り換えてクチンからバラム県都ミリへ。乗り換えるたびに小さくなる飛行機は、ミリから内陸部の玄関マルディ行きはとうとう20人乗りのプロペラ機となり、蛇行したバラム川上空を低く飛ぶ。森林の中、いたるところに伐採道路があって痛々しい。川にはたくさんの材木が浮かんでいる。

サラワクについてのこれまでの私の関心といった人並みにちょっと毛のはえたくらいのものだ。熱帯林伐採が、とりわけ森の人ブナンの生存を脅かしていることは知っていても、伐採をやめさせるための行動は黒田さんをはじめとするJATAN（熱帯林行動ネットワーク）の人たち任せにしてきた。黒田さんの悲鳴のような訴えをときどき聞きながら、「状況が悪くなる一方なのに、よく神経を痛めもしないでやってるなあ」と感心していたものだったが、自分で現実を見て、どう行動できるのか、やっと一歩踏み出そうとしているところだ。

「地球の友マレーシア」

人口1万3千ほどのマルディの町には、ハリソン・ガウさんをリーダーとする「地球の友マレーシア」のサラワク支部があり、サラワク各地にフィールド・スタッフを配属して果敢に活動している。森の中に散らばっている先住民のネットワークを作り、伐採道路封鎖、政府・伐採会社との交渉や訴訟、ダム建設反対など、サラワクの先住民の闘争は「地球の友マレーシア」の支援抜きでは考えられない。

カン人のハリソン・ガウさんは、30歳になるというのに10代に見えるほど少年っぽい。アイシャドーを入れたようなちょっと鋭い目を除けば、えくぼの笑顔が人なつこい。しかし、彼がひとたび話しはじめれば、誰でもたちまちひきつけられ、全先住民のリーダーであることを納得する。それにしても逮捕や軟禁生活を経験し、秘密警察につねに見張られ、サラワク政府からもっとも怖れられている人物の1人だとは容易に信じがたい。

バラム川をさかのぼる

マルディから船でバラム川をさかのぼること5時間、カン人の村ウマバワンに向かう。先住民の人たちは川のほとりのロングハウスと呼ばれるサラワク式長屋に住み、川に沿った土地に焼畑で陸稲を作って生活している。その奥の森は大切に残し、そこから森の幸を得る。ところが伐採会社が来て彼らの耕地に無断で伐採道路を通し、先住民たちが大切に守ってきた森を伐採し始めた。伐採を中止してくれるようかけあっても責任の所在をたらいまわしにし、そうこうしているうちにも伐採はどんどん進む。川



のいたるところにそんな材木の積み出し港があり、船に乗っていれば材木を満載した船や、材木を100メートルもの筏にして引いた船とひっきりなしにすれちがう。そんな光景が限りなく視界に飛び込んでくるので、カメラを向けていた林さんと私は、あっというまに伐採キャンプ不感症になったくらいだ。

ところで、サラワクで見る黒田さんは、東京で見るストレスのたまった顔をやめて、すっきりしたい顔をしている。「サラワクの人っていいでしょう。サラワクに来た人は誰でもサラワクの人が好きになるんだよね」これはうなずける。「知っている誰かに似てるって顔がいっぱいある。日本人とサラワク人はルーツが同じじゃないかな。とくにブナン人はね」ん？ そんな説は聞いたことがない。黒田さんのサラワクへの思い込みの強さは相当なものだ。

カン人の村ウマバワン

ウマバワンはサラワクで初の伐採道路封鎖をして7カ月伐採を止め、ついには人口400人に満たない村で42人の大量逮捕者を出し、現在は政府と伐採会社を相手どってクチンの法廷で闘争中という輝かしい歴史を持つ村だ。3月に来日し、JVCにも来てくれたリーダーのジョクさんをはじめ、伐採反対同盟の結束は固く、男たちが逮捕されているときは女たちがみんなで力仕事も一切したという。

マレーシア・サラワク州



ウマバワンで、一足先に来ていた弁護士の大西さん、林(良二)さん、薦田さん、土曜・日曜と有給休暇は目一杯熱帯林伐採反対活動にかけている市役所職員の西岡さん、電波ニュースの島さんと合流する。

1階が集会場になっているジョクさんの家で、林(達雄)さんの診療が始まった。林さんがれっきとしたお医者さんだったことを久し振りに思い出す。しかもただの外科医ではなく、タイのマヒドン大学で熱帯医学も学んでいるのだ。出発の前日にあわてて聴診器を買ったにしてお医者さん姿が板についている。JVCの東京事務所ではんこを押したりしている林さんよりは数段りりしい。

半農半狩猟のウマバワンでは、まだ栄養失調などは顕著ではない。しかし、まもなく伐採が終り、続いて村の耕作地までもを含めて、伐採跡地にアブラヤシのプランテーションができれば、今までの自立した生活は完全に営めなくなる。食べるために耕す土地はなくなり、割り当てられた区画に油椰子を栽培して売る生活が始まる。価格の暴落、土地の疲弊、化学肥料や農薬の投入と¹¹⁾不安材料ばかりだ。現金に依存する生活では、収入が十分でないときは食糧が不足し、栄養が足りなくなるのは必至だ。自分の住む土地のことを知りつくして、環境を守りながら生きてきた先住民の自立生活は、見知らぬ外部に住む人たちの欲望で破壊され、どんどん奪われていく。



トゥッター川の上流へ

いったんマルディに帰ったあと、春日さんが合流して今回の旅の最大の目的である定住ブナン人の村を目指す。パラム川の支流トゥッター川上流の村、ロングイマンを足掛かりとしてどこまで奥地に入れるのか。できれば移動ブナン人にも会いたいが、私たちの日程が限られていること、トゥッター川流域は森林破壊が進んでいるため、移動ブナン人たちはもっと深い森に入っていることから難しいらしい。ロングイマンまでは船を乗り継いでマルディから7時間の行程だ。

サラワクのあるボルネオ島は、もともと島全体が熱帯林に覆われていた。森の中は湿度が高く、したがって雲ができやすく、年間の雨量も4000ミリから5000ミリと湿潤だ。その豊富な水は何本もの川の流れとなって、いつも豊かな水をたたえている。この島に住みついた人々のほとんどは川沿いに村を作り、生活用水だけでなく、交通・交易など外部との交流を川に頼ってきた。下流に住めば住むほど、他民族との接触が増え、交易の機会も多くなるが、戦いの機会もまた増える。そこで、強い民族ほど下流に住むという構図が成り立つ。同じように見える熱帯林にも、土地の肥えたところと痩せたところがある。農耕も営む先住民たちは、土地の肥えたところから占有していき、サラワク全体の人口は150万人と少ないものの、川という川の流域はほとんど利用されていると考えていいようだ。

このように川沿いに定住していった先住民のなかであって、定住をせず、森の中を移動して暮しているのがブナン人である。3家族から10家族かたまって移動しながら、狩猟採集生活を営んできた。ところが約25年前、サラワク州政府はブナン人たちにロングハウス、学校、病院などを建設し、農耕の指導をし、種も配給するから定住するようにとなかば強制的に定住させた。そして、ときを同じくして森林



伐採を開始した。今、ブナン人の総人口は5000人から9000人といわれており、うち、定住村に住まないで移動を続けているのはわずか300人ほどといわれている。

屋根のない船で雨に打たれながらロングイマンに着いたのは、もう日もとっぷり暮れてからだ。たった20戸の小さな村、ロングハウスの中の1戸モスさんの家に泊めていただく。黒田さんではないけれど、カヤンの人たちよりブナンの人たちはもっと懐かしい。心から仲よくなりたいと思う人たちだ。

熱帯林の中へ

早朝、3人の弁護士と別れた6人は、モスさんをはじめとする6人のブナンの人たちの好意に甘えて重いリュックを担いでもらい、約20キロ離れたロングバンガンへと出発した。いよいよ熱帯林に入る。豊かな熱帯林、そして壊されていく熱帯林をしっかり見たいというのが私たちの願いだった。

熱帯林の中はすごい湿度だ。シャツがすぐにじっとりと濡れてくる。ブナンの人たちだけが通う道を大小の倒れた木をまだぎ、断崖の途中にやっと足場を見つけ、小川の中を膝上までつかって歩き、細い丸木橋を渡り、ラタンの刺にひっかけられ、ツル植物のトンネルをくぐり、まるで障害物競争のようだ。急な登りが続くところはさすがにきついが、酸素が満ち満ちているので、息苦しくならないのが嬉しい。

2時間余り歩いたら伐採道路に出た。昨年ブナン人たちが道路封鎖をして87人が逮捕されたところだ。木立におかまいなく、高いところを削って低いところに土盛りした伐採道路が、赤い土色も不気味にうねっている。チェーンソウの音、新たに伐採道路を作っているブルドーザーの音などあちこちから聞こえてくる。ブルドーザーも、人の移送に使う四輪駆動の車も、材木運び出しのトラックもほとんど日本製だ。ブナンの人たちはこれらを怒りに燃える目で

睨みながら、押し黙って歩いて行く。伐採道路では日光をさえぎる木立はないし、単調で歩きづらい。歩いてみてはじめてわかる非人間的な道だ。1時間余り歩いて再び森の中へ入ったときは本当にほっとした。

ロングバンガンにやっとの思いで着いたのは、夕闇の濃くなった7時過ぎだった。ブナンの人たちが6時間かかると言った行程が、結局11時間かかってしまった。日頃山歩きしている西岡さんまでが、近年になく疲れたと言う。ほかの人たちはただ水を欲しがり、ずぶ濡れの服を替えるのももどかしく、声もなく横になっている。西岡さんだけがガスを取り出し、まずコーヒーを沸かし、ラーメンを作って勧めてくれる。お腹が温まり、みんな少しずつ元気を取り戻した。

定住ブナン最大の村ロングバンガン

ブナン人の定住地は何カ所かにあるが、ロングバンガンは67戸、300人と最大の大きさである。この村には「ブナン人協会」の会長ジュインさんがいるせいか、サラワク州政府、伐採会社などによる監視やいやがらせも多い。ジュインさんも家族も身体をこわし、かなり疲れているようだ。林さんが診察した結果、ここには栄養失調の子供が多く、皮膚病など、栄養失調からくる病気も多くみられた。また、外部との接触が増えた上にたくさんの人たちが一緒に住むことにより、結核、リュウマチ熱などの感染症もかなりみられた。

ブナンの村では食事は驚くほど貧しい。数軒でごちそうになったけれど、米とキャッサバの葉の煮たものだけ。そのほかにはワラビや小さなナスがわずかと3週間も森の中を歩いてやっとさがしたサゴヤシ、中国人商人から買ったサゴヤシがあるだけのようだ。こんな食事を続けていたら栄養失調にならない方がおかしい。この10年、伐採がひどくなり、森林が破壊するにつれて食糧事情は悪くなる一方だという。かつて、主食のサゴヤシは森の中に豊富にあり、1本切ると10人が1カ月以上も食べられたという。

行き止まりからの脱出

ブナン人たちは、「生活のすべてがある森を伐採しないで欲しい。あの森さえ残してくれたら生き延びられるかもしれない。しかし、あの森がなくなったら、私たちの生活はおしまいだ」と村はずれの森

を指差す。また、「なんとかコマツのブルドーザー、三菱のキャタピラー、日野のトラック、トヨタのランドクルーザーなどを売らないで欲しい」と言う。三菱商事の子会社による伐採、丸紅商事、伊藤忠、ニチメンなどの商社による材木の輸入など、サラワクには日本の欲望が影を色濃く落としている。

JVCで一貫して考えてきたのは、地域に生きる人たちが、その地域でどういきいきと生きられるかということだ。どのような形であれ、森がある地域においては人は森を利用してきた。利用しつくした地域、植林で再生林を作ってきた地域、原生林を残してきた地域といろいろだが、ブナン人など森の民は森から幸を得ながら、大切に守ってきたのだ。

再生が不可能な熱帯林跡地へ再生林を作る試みはある。しかし、そのほとんどは水源や環境を守るための植林ではなく、しかも地元の人たちの願いを無視しての商業植林だ。採算をとるためには小さくても3000ヘクタールの農場を作らなければならないアブラヤシのプランテーションに見られるよう、生産の効率だけを考え、広域にその土地の種ではないものを1種しか植林しない、モノカルチャーが普通である。

森は人のみが作るものではない。むしろ人は壊す一方で、他の動植物が共同して作りあげるものだ。サラワクには植物だけで1万種もあるという。その種を減らし、農薬と化学肥料でモノカルチャーを推進することが当面可能であるとしても、原生林がすべて失われたときもまだ可能かどうかはわからない。

今、豊かな国の人たちは貧しい国の人たちを食べさせていない。貧しい国の人たちが環境や自分の生活や命まで削って豊かな国の人たちを食べさせているのだ。豊かな国の大量消費生活を支えるためにこれ以上の困難を貧しい国の人たちに強いけないために、私たちは私たちにできるあらゆることをしたい。

後記：世界環境デーの6月5日、JVCはJATANとともにサラワクに関する共同声明を出し、6月9日には緊急報告会「サラワクの森から」を開いた。また10月29日には、ウマバワンで「大量逮捕3周年記念フェスティバル」が開かれる。世界から、周辺の村々から1000人の参加者を予定している。村人の期待に応えられるよう、JVCでもスタディーツアーを計画している。詳しくはT/E 101号を御覧下さい。

私は生活改善普及員

ケオウラ・スウィデットさん

私、ケオウラ・スウィデット、38歳。1989年7月から4カ月間、母子保健を中心としたJVCの生活改善普及員養成コースに参加しました。カンムアン県タケック郡チョムトーン村出身です。高校を卒業したあと、小学校教師をしていましたが、養成コースに参加した頃はカンムアン県タケック郡女性同盟副支部長をしていました。家族は、長男15歳、長女、次女は13歳の双子です。両親とも健在で、一緒に暮らしています。姉と、妹弟が5人いますが、8年前に難民としてカナダへ行きました。今はバンクーバーで元気にしているようです。

家庭訪問

本来の女性同盟支部での仕事と、生活改善普及員の仕事と2つの仕事をうまくこなすのは大変です。一応、週の半分は普及員の活動にあてるように予定を立てています。JVCの援助で、カンムアン県女性同盟事務所敷地内にできる母子保健トレーニングセンターが完成したら、その責任者も兼ねることになっています。

私の担当は、ソムサアット村、ナムアン村、ソムサヌック村の3村です。自宅のあるチョムトーン村は、同じ村に住むスンカムが担当しています。チ



▲家庭訪問をするケオウラさん（左）

ョムトーン村から縦横二方に広がるようにして3村が位置しています。

自宅から5分程のソムサアット村は、ベトナム系の人が多く住んでいます。子だくさんの最高は、つい2～3日前に13人目を出産した43歳の女性。母乳もよく出ます。トレーニングを終えてからすぐに家族計画の説明をしたのですが、間に合わなかったようです。

ラオスでは、出産後3日～1カ月は炭火を焚いた上のベッドで寝る習慣があります。この期間は冷たい水などを決して飲まず、沸かした熱いお茶を飲む、お湯で身体を洗う、もち米とトウガラシ入りフィッシュソースだけしか食べない等、昔から言い伝えられたものがあります。しかし、出産後の身体に十分な栄養を摂ることが必要であること、そのために食べてほしいものを説明します。とてもよく聞いてくれるのですが、それを実行する段階まではまだまだ届きません。

もともとベトナム人といっても、長いことラオスに住んでいますので特に問題はありません。手に職を持つ人も多く、皆さん働き者です。

出産後の家庭で20分程話をしてから、今日はこれからソムサヌック村へ行きます。

タケック郡のはぼ中心に位置するソムサヌック村には、夫を亡くし、5人目の子が3カ月目の家庭に様子を見に行きました。出産後、体調が悪く子供たちの世話にも手がまわらず、ぐったりして寝ているのです。親戚の人が時々来てくれています。今は狭い畑で取れる野菜を食べたり売ったりして生活しています。

大部分の家庭は、夫が公務員、教師で、妻が畑を小規模で耕しているか、マーケットで物を売っている人たちです。子供のほとんどは学校に通っていますが、1教室に60から70人もの生徒がいるのが通常



◀生活改善普及員が村々を訪問する

です。ラオスでは一人ずつの教科書がありませんから、ノートとえんぴつだけ持って学校へ行きます。

村に入って家を訪問する時は、その村の女性同盟代表や村長にも声をかけて、できれば一緒にまわってもらおうようにしています。そうすれば、自分たちの村で今、どんな問題があり、どうしたらよいか等、彼らも巻き込んで考えてゆけるからです。

普及員としての悩み

なんといっても、村人が一番関心を持っているのは家族計画なんです。ラオスの人口は約400万人程ですから、人口増加に問題はないのですが、出産間隔をおくことで母子共に健康であることに目的をおいています。いくつか方法がありますが、器具等ラオスにはまだありませんから、紹介しても実際に役に立ちません。それで荻野式が中心になるのですが、カレンダーなど各家にありませんから、まずその辺の意識を変えていくように働きかけていく必要があるんです。

何度か訪ねて行くうちに打ち解けてくれ、悩みを相談してくる人もいます。でも、その反対に煙たく思う人もいます。また、日中は、ほとんどの家庭は仕事に行ってしまう留守なので、なかなか村人に会えないのです。かといって、早朝や夜間は自分の事もしなければなりませんし、電気がない村での夜は出歩けません。

カンムアン県の5人の普及員は、皆私と同じように2つの仕事を持っています。中にはまだ若いので人前で話すことに慣れていない者もいます。それで、同じ問題を持つ人々を集めて、現在建設中のセンターでトレーニングや講習ができればいいと考えています。私たちができる内容は自分たちでできますし、

出産後は炭火の上のベッドで寝る▼



もっと専門的なことは県や郡の専門家、また、その担当の方をお願いしてできると思います。

ビエンチャンでのトレーニングは、全てが新しい知識で、日頃感じていた問題などの解決の糸口を見つけること、それを実行してみること、普及員の役割についてなど、学びました。でも、実際に村に入ってみると、思うようにいかず大変だと思っています。ラオスでは、まだ普及員という仕事をする人がいないので、私たちもみようみまねでやっています。ですから、少なくとも月に1回は5人で集まりレポートを書きながら、お互いの活動についての意見を交換する場をつくるように心がけています。

家事については、同居している母親と娘2人がよく手伝ってくれます。朝は5時には起きますよ。私の家ではアヒルを30羽程飼っていますし、父は魚を養殖しています。井戸がひとつ。水はあるのですが、この辺一帯が赤土なので、水は常時にどっているのです。ですから必ず沸かして飲むのですが、お茶の色をしています。家庭菜園も少ししていますので、ちょっとした野菜はいつでもあります。今年中には両親がカナダにいる姉たちを訪問することになっており、楽しみにしています。息子も父をよく手伝ってくれています。(原田恵美子)

犬養道子さんから

JVC設立10周年に寄せて

「犬養道子・みどり1本」募金にご協力をいただいている犬養道子さんから、JVC設立10周年に寄せてお便りが届きました。この3年間、犬養さんには資金面、精神面の支援ばかりでなく、時にはきびしいお叱りを受けることもありました。以下は今回お寄せいただいたお便りの全文です。

JVCが満10周年を迎える。1990年正月発表の朝日社会福祉賞受賞は、JVCを少しでも知る者にとっては、当然のことではあった。が、格のあるその賞を与えられたことは、また、それによって全国にJVCが知られることになり、まことによろこばしい限りである。

10年 — それは全世界のあちこちに、惨の語のなとなまやさしく聞こえるかの、苦悩悲哀の地の（それまでもこと欠かなかったにせよ）クローズアップされた一時期である。インドシナに、アフリカに、中南米に、中近東に……非政府・民間人の馳せ参じ

る伝統を持たぬ日本の、目立たぬ人々によって史上特筆されるべき惨苦絶頂にあったときのインドシナ半島に、小さく生まれたJVCが、いま、日本国籍以外のヴォランティアをも擁するものに育ち上がった。インタナショナルとはまさにこのようなことを指す。日本製品を各国各地に売りまくるのがインタナショナルではないのである。JVCは「国際」好きの日本人に、「国際的」とは何かを指さす小さな光ともいえる。巨大な資金源をバックとせず、10年間、着実に「現地の人々の中で、彼らとともに」より人間らしい生活を築くにはどうすべきかを考え、実践に移してきたのはJVCである。

「試行錯誤」と名づけて刊行する小さなパンフレット・現地報告は、その名の通りの歩みを示すとともに、JVCの謙虚さをも示すものだ。

われわれの、おごりの時代、そのような人間的謙虚さこそは、誠意ある実践と、最も有効性に富む仕事のための、第一の基礎のように思われる。栄誉・安定はJVCに参じる透明な人々の身からはほど遠い。大方のひきつづいての資金面での援助と精神的支えをひたすら乞う次第。

JVC、おめでとう！

ひき続き難民支援を！

ビルマ報告会

5月22日(火)、午後6時30分より湯島総合センターで、タイ・バンコク事務所広報担当、大石道子の報告会が行われた。彼女は3月12日～14日、タイ/ビルマ国境、サンカブリ付近の難民（モン族、カレン族）を視察、その時の状況と、難民に対してどのような援助の可能性があるかを話した。

司会の岩崎駿介JVC代表から、「今回のビルマ少数民族難民問題は、◎環境◎人権◎ODA◎難民と4つの問題が一挙に重なった重要な問題である。外貨が不足しているビルマ政府は、タイとの国境近くのチーク材をタイ商人に売り渡し、それとともにそこ



に住むカレン、カレニー、モンという少数民族に対する圧迫を強め始めた。その結果40年近いビルマ軍と少数民族の闘争は激しさを増し、難民が倍増している。そこで彼らは食糧不足やマラリアに苦しめら

れている。しかもそのチーク材が日本に入ってきていないという保証はなく、まさに我々自身の生活と深く関わっている」と発言。それを受け、会場からは「確証はないが、日本との関係はODAも含め、非常に密接である。継続的な興味、支援を持ち続けていこう」という提案もあり、ビルマ問題を考える会では「DAWN(ビルマ学生民主戦線機関誌)日本語版」(300円)の定期発行を始めるなどの紹介があった。

当日はビルマ人留学生も参加し、ビルマに関わる情報を少しでも手に入れようと真剣に話に聞き入っ

ていた。総選挙を目前に控え、ビルマがどのような動きをするのか、国境の情勢はどうなるのか予断を許さないところである。

なお、JVCでは難民への緊急援助を継続中で、これまでに集まった約30万円をタイの難民救援組織に大石が届けました。引き続き皆様からのご支援をお待ちしています。

振込先：郵便振込 東京9-27495

加入者名 JVC東京事務所

※裏面に「ビルマ」とお書き下さい。

カンボジア平和のための

声明を発表

去る6月4日、5日、2日間にわたって開かれた「カンボジア和平会議」は、停戦と最高国民評議会創設への合意がシハヌーク大統領とフンセン首相との間で交われ幕がおりた。和平実現への歴史的な一歩が日本で踏み出されたことに私たちは大きな意味と責任を同時に感じている。

かって平和と自然の恵みに満ち溢れていたカンボジアが戦争や殺りくの悲劇の国と化したのは20年前。1975年4月から約3年9カ月続いた波尔・ポト時代の傷跡は国の内外を問わずクメールの人々の心の内に深く刻みこまれている。一日も早く平和と国の再建をと1980年以降カンボジア問題にとりくみ続け



救援を待つ避難民の親子

てきたNGOのグループ「カンボジアに関するNGOフォーラム」(欧米豪日、31団体)の共同行動の一環として、JVCも日本国内に向け次のような声明を発表した。

1. 即時停戦の実現
2. カンボジア国内の人々に対する、国際的援助、二国間援助の再開
3. 停戦実現後の総選挙による合法政権成立まで

の間、国連のカンボジア議席は「空席」とすること

4. 戦闘によって生じた、国内避難民(約70,000人)に対する緊急救援への呼びかけ

会議において成立した停戦も、波尔・ポト派の不承認によってその実効性が危ぶまれている。このままでは国際的孤立の中、戦場の拡大とともに、一つの国として崩壊していく瀬戸際にある。私達日本市民、世界の人々が、又日本政府もその責任において発言し行動していくことを訴え続けたい。(鈴木 由子)



「やせるのなんか簡単だよ、たべなきゃいいんだ」 今村洋子

メサイアコンサートと

JVCカレンダーからの報告

昨年は、慈善コンサートにご協力下さり、有難うございました。収益金14,385,368円は、JVCの海外5現場（エチオピア、ソマリア、タイ、カンボジア、ラオス）のプロジェクトに、280万円ずつ均等に充当させていただきました。

今年も12月17日（クリスマス・ファミリーコンサート）と12月23日（メサイア）のコンサートを予定しております。昨年同様、ご支援ご協力をお願い申し上げます。

コンサート実行委員会

カレンダー「アジアから — 人間」の販売による活動資金づくりにご協力ありがとうございました。約1万2,000部を売ることができました。

収益金8,874,351円はエチオピア、タイ、カンボジア、ラオスの4つのプロジェクトにそれぞれ200万円ずつ使わせていただくことになりました。残金につきましては、来年度のカレンダー制作の予備費として利用させていただきます。

今年もすでにカレンダー制作の準備に入っています。昨年同様よろしくお願いいたします。

JVCカレンダー事務局

南こうせつさん

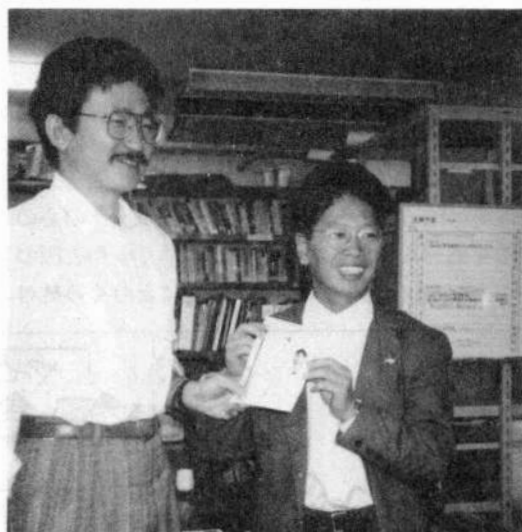
エチオピア救援に寄付

6月1日、午前11時、歌手の南こうせつさんがJVCの事務所を訪れ、林達雄事務局長に625,351円の募金を手渡した。

南さんは環境問題にも関心が深いジョン・デンバーとも親交があり、何度かいっしょにコンサートを行っている。

エチオピア飢餓に対してのBAND・AIDやアマゾン熱帯雨林破壊に対するスティングの活動をいうまでもなく、欧米ではミュージシャンたちも社会的な問題に関心があり、コンサートなどで得た収益金をNGOや国連などに寄与することは珍しくない。南さんはこれまでヒロシマ・コンサートを重ねてきたが（今年で4回目）、JVCのようなグループと関わりたいと思ってきたという。そこでこの4月にJVCのエチオピア緊急救援の新聞記事を見てすぐJVCに連絡をとり、募金活動を始めたのである。

「子供が飢えている。なんとかしなければ、と思いました。自分たちが直接何かをすることはできませんが、音楽でムーブメントを起こしたい。僕がイ



募金を手渡す南さん

ンターフェロンのような力になればと思います」

今回はコンサートの収益ではなく、宇崎竜童さんや山本コウタローさんなどの友人たちに呼びかけて集めた募金だが、機会があればコンサートなども企画したいという。

募金箱は大分の自宅にも置いてあり、奥さんが積極的に地域の人に呼びかけている。これからも募金が集まったら送って下さるという。末長いご支援をお願いしたい。

やりました!

松山

初めての企画大成功

5月20日(日), 前日の大雨とうって変わって, 快晴のもとに, チャリティウォーク in 松山(第1回松山グリーンウォーク)が行われた。200人余りの参加者が松山城経由で子規の俳句などの句碑巡り約15キロのコースを歩いた。エチオピアと日本の地図を描いた張りぼての地球をかついで歩く人, 家族連れなどで賑わった。最終地点の道後公園では, 歌, 落語, ダンス, 和太鼓実演, 綱引きなどのイベントや各グループのバザーがあり, 思い思いに楽しんでいた。(右写真)

「一人でも歩く」と宣言して企画した半年前。これだけの人が参加してくれるとは誰も予想しなかっただけに, 反響の大きさに喜びもひとしおだ。

半年前, 国際交流の各団体に協賛を呼びかけたが1通の返事も来ない現状に, 松山では無理なのかなと弱気になったのを思い出す。地方で何かできるはずと思い続けて3年。簡単に諦めきれものではない。昨年エチオピア人スタッフ来松の時, 環境フォーラムで知り合った人たちに呼びかけ, 実行委員会を結成。スポンサー探しに奔走するが, 愛媛ではJVCは知名度がない, 実績がない, うさん臭いを取り合ってくれない。それなら実績をつくろうと燃える。やっとの思いでスポンサーを見つけるが, 交渉はなかなか大変だ。

こうして対外的な交渉を進めると同時に, アースデーにちなみ環境問題を考える講演会とエチオピアの飢餓現状報告会を企画する。4月22日に愛媛大学農学部立川涼教授の環境問題の講演の後, JVC事務局・林達雄氏のエチオピア飢餓現状報告会を開く。ここで環境問題を考え, エチオピアの現状を知ってもらった。1カ月後の5月20日, エチオピアの飢餓を支援するために歩こうという企画が反響を呼んだようで, マスコミが大きく取り上げてくれた。

何しろ初めてのことで, 地元銀行が募金振込み手数料を無料にするという協力で大いに力づけられたが, 4日前に銀行の手違いで無料になっていないと



の連絡に慌てたり, ゴールに張るテントの許可が2日前にクレームがついたのに, ウォークの新聞記事が功をなし, 「JVCって最近よく聞くね」の言葉にこの時ばかりとJVCをPRして許可になるなど, 当日までハプニングには事欠かないありさまであった。今回はさまざまな出会いがあり, 多くの人の支援と協力があって初めて第1回が実施できたことを嬉しく思う。そして, 地方でもできる, 地方だからできる, というを感じた。とにかく, 行動することの一語に尽きるのではないだろうか。

5年後には, 「チャリティウォーク」ではなく, 「松山グリーンウォーク」で主旨を理解してくれる恒例の行事として松山で定着させたいと思う。そして, 心密かに5年後のウォークにはウォーク写真展ができればと5年後に心を馳せている。

あなたの町でもウォークを企画してみませんか。

(土居 陸子^{たか})

東京

5月の行事として定着

5月20日(日), 前日の雨模様もどこへやら。快晴に恵まれた1日となった(気象庁に問い合わせで晴天確率が一番高い日を選んだだけのことはある)。

当日は850人近い人の参加があり, 前回より日本人の割合が増え, 国内にこの行事が定着している感があった。今回は9団体が参加。コース途中では飲食販売の出店があり, 民族衣裳を着た一団も表れて, 道行く人の目を楽しませてくれた。また, ゴールの小金井公園では, 展示, 楽器演奏, パントマイムなどが行われ歩き疲れた人たちもくつろいでいた。

東京スタッフ大移動

● 今泉 恵さん —— タイ担当

スラム・プロジェクトで2年間現地にいた今泉さんですが、今度東京事務所タイ担当となりました。「東京にいと色々な情報が入ってくるけれど、現場との距離の大きさが細部を見えなくすることもある。現場ではその対象しか見えず、視野が狭くなりがちだがその行動には現場での合理性、必要性が伴うことが多い。今回現場を離れて東京で仕事をするわけだけでも、今までそこにいた感覚を忘れずに、現場の身になって丁寧なコミュニケーションを取っていききたいと思う」。

なお、今泉さんの後任には、しばらくT/Eの編集をしていた池島千津子さんが4月に着任しました。

● 柴田久寿子さん —— 広報担当

2年間のブランクを経て（その間もボランティアとして参加していましたが）再び専任スタッフとして広報を担当するのは、大分県出身の柴田久寿子さんです。「いくつかのNGOに関わってみたけれど、今一番元気がいるのがJVCだと思う。個人的にも愛着があるし、JVCには自分が参加しているという実感がある。また1年生のつもりで頑張りたい。広報としては守りではなく、積極的に広くアピールしていきたい」という謙虚で、なおかつパワフルな久寿子さんです。

● 鈴木 由子さん —— カンボジア担当

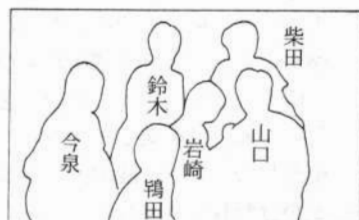
「パナニコムでコーディネーター兼日本語教師をしていた時は、教える立場を越えて向こうの人（難民）と対等な関係になることができなかった。けれども、2月、3月とカンボジアを視察して、カンボジアの人々は自分の国に自分の足で立っているという感じがした。そういう人たちと、プロジェクト上のつきあいではなく人間同志の関わりを持ち、それを周りの人にもどんどんシェアしていきたい。人のためではなく自分のために、これからカンボジア担当の仕事をして行きたい」という鈴木由子さんです。

● 山口 誠史さん —— ソマリア担当

JVC神奈川の代表から紆余曲折を経て、アフリカ担当になりました。山口誠史さんです。「アフリカ報道のブームが終わったからといって、アフリカの飢餓がなくなったわけではない。あの状況は今でもまだある。遠い国の出来事ではなく、もっと身近に感じ、考えてほしいと思う。アジアも貧しいけれど、アフリカはもっと厳しい。豊かさの基準が違うんだよ」。でも山口さんにとっては、「360度見渡せる視界」や「日本で見るより全然大きな夕陽」も同じくらいに惹かれるものらしいのです。

● 鴫田 三芳さん

ほんの40～50年前は誰もがやっていたことなのに、今それを始めるとなると誰もがそんなことは無理だから止めた方がいい、という農業を鴫田さんは始めます。「百姓をしようと思ったのはJVCで受けた影響が大きいと思うよ。みんな心配してくれるけど、やってみようと思う。植物の成長は人間の目には見えづらいけれど、子供の成長に似てるよ」と言います。いつか本当に鴫田さんの畑を耕しに行きます。私は結構使えんと思います。その時畑に私の大好きな西瓜なんかあると最高なのですが。鴫田さんのデビュー大成功をお祈りしています。（金成邦子）



地球人として生きる・市民による海外協力

定価 600円 岩波ジュニア新書

ひとりの市民として、第三世界とかかわる。人々の笑顔に触れ、彼らに対して「日本」がなにをしているかを知る。そして君は気づく、「援助」という言のなかの傲慢さに。本書では、JVCをはじめとするNGO（非政府組織）が国際協力の中で果たしている役割を紹介し、現場報告をおりまぜながら、何が本当の「協力」なのか、私たちのやるべきことは何なのか、考えていく。

JVCアジバール病院・エチオピア緊急医療救
援報告 定価 1500円 連合出版

この地球上に、先進国の豊かさとは無縁の人々がいる。干ばつのエチオピア。

視察後ただちに現地入りした医師、看護婦、コーディネーターらは病院を建てながらテントで救援活動を開始した。……そして一年後、植林事業へと引継がれた。地球人として考え、行動し、数千の命を救いながら悩んだ、試行錯誤の記録。

展示用パネル

①エチオピア「緊急救援」

アルミ製パネル 全20枚セット（カラー）

B2サイズ 説明文付き

②グリーン・フォー・アフリカ「村づくり」

アルミ製パネル 全15枚セット（カラー）

B3サイズ 説明文付き

③ソマリア「農業による難民の自立」

アルミ製パネル 全20枚セット（カラー）

B2サイズ 説明文付き

協力：国連難民高等弁務官事務所

④JVCの活動の記録「10年の歩み」

シート 全10枚セット（カラー）

B4サイズ 説明文付き

※パネルは貸し出し料 3,000円（送料込み）

但し、返却代はご負担ください。

NGOが見たカンボジア・国際的な弱い者いじめ

定価 1500円 連合出版

「あれだけ苦難を強いられたこの小さな民族が大国の利害のために、なぜいつまでも国際的孤立という罰を受けなければならないのでしょうか。カンボジアの人々には平和が何より必要なのです。」20年間にわたって戦争と暴政に痛めつけられたこのアジアの小国は、国際政治の壁に阻まれて、西側諸国からの開発援助を拒まれ、わずかに民間援助を頼りに、荒廃した国の再建に立ち向かわざるを得ない。この中で、もはや黙っていることは、人権や正義にもとるおそれがあると判断し、あえて発言した書である。

JVC GOODS

貸し出し用スライド

①素顔のラオス

説明テープ付約30分 63枚セット

②ラオスとJVCのプロジェクト

説明テープ付約30分 55枚セット

※スライドは貸し出し料 3,000円（送料込み）

但し、返却代はご負担ください。

記録映画・ビデオ

①国境を越えた人々〜カオイダン難民キャンプの記

録（文部省選定）48分、1巻（16ミリ・ビデオ有）

制作：浄土真宗本願寺派高岡教区寺族青年会

後援：外務省、他。

協力：国連難民高等弁務官事務所

②エチオピアの鼓動 17分、1巻（16ミリ・ビデオ有）

制作：岩波映画

③バクナ共同体〜タイ・クロントイ・スラム

（文部省選定）28分、1巻（16ミリのみ）

制作：濱谷プロダクション

※16ミリ貸し出し料 5,000円（送料込み）

ビデオ 2,000円（送料込み）

但し、返却代はご負担ください。

取るたびに切れてしまう電話に業をにやし、修理に呼んだサービスマンの第一声である。電話機の中はゴキブリのフンだらけ。いかに優秀な機械といえどこれではたまったものではない。

ホロホロホロ……。電話機がうまく作動するかどうか、電話局とのやりとりが続く。

♣ 虫の話をもう1つ。

最近話題になったのはさなだ虫とランブルベン毛虫である。さなだ虫は長いので途中で切れても再生してしまう。あるスタッフは、とうとう入院して2メートルもの代物を出すことになった。ランブルベン毛虫の方は一見かわいらしいが、なぜか虫持ちは女性スタッフが多かった。

湯島

ホッ
と
い
ん



“ボランティア活動”——これを説明するのはなかなか難しい。「有給です」というとびっくりされるからだ。JVCの活動は決して奉仕とか自己犠牲というものではなく、もちろん“ただ働き”でもない。JVCではボランティアを“自発的意志”などと難しい言葉で説明しているが、「今の世の中ちょっとおかしいんじゃない。もんくを言う前に行動しようよ」というぐらいの意味で使っている。だから「りっぱなことをなさっていますのね」などと言われるとうろたえるし、「閑人のすることさ」などと言われればカッとくる。

どの記事も好意的で新しい女性の生き方として注目しているが、実は男性にとってこそ新しい生き方なのではないだろうか。お金万能の世の中で、もっと別のことに価値を見出した人たちだ。ぜひ今度は男性にもインタビューして下さい。

▲緊急救援の新聞報道が載るたびに、いろいろな問い合わせとともに食料品などが送られてくる。この4月も“エチオピアに再び飢餓”の新聞記事が載ると、もう2〜3日後にはスナック菓子、チョコレート、カップラーメンなどが送られてきた。ご厚意はありがたいのだが、何万人もの対象者に配ることはできないし、彼らの食物とはあまりにもかけ離れている。

今回必要な食糧(小麦や油、粉ミルクなど)は、国連機関やほかのNGOから調達できそうだ。現場は港から遠く、輸送も困難な所である。皆様からの募金は、現場でほんとうに困っている人々に手渡すための輸送や配給に使わせていただくことになった。

そのようなわけで、送っていただいたお菓子はスタッフが食べました。

ごめんなさい。(ま)



ランブルペン毛虫

JVCプロジェクト

1990年5月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 林 達雄(事務局長) 熊岡路矢、星野昌子、 前川昌代、鶴田三芳、 山口誠史、岩崎美佐子、 富安光子、今泉 恵、 鈴木由子、富安庸太郎、 柴田久寿子、高梨直樹
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 また県内の市民団体との共同事業の企画、運営。 現在、民間協力ネットワーク・海外協力部会の調整に携わるほか、第4回ポートウォークよこはまと、エチオピア支援バザーの企画が同時進行中。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト ドナー団体であるケアハウスさくら苑を会場に行われる「Y ² Joint Party (ワイワイ・ジョイント・パーティー)」のプレ企画としてサンモール・インターナショナル・スクールの生徒6人と以下のプログラムを行った。①4月22日、ラオスのパネル展示、スライド上映会 ②4月28日、ラオスのパネル展示 ③5月12日、カンボジアのパネル展示、カボチャのプリンづくり ④5月19日、カンボジアのパネル展示、スライド上映会。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑	小野豪大、他約60人
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州、青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む2万5,000人の干ばつ被災者に対して ①フード・フォー・ワークによる食糧配給、泉の保護、環境保全、支道建設、②保健衛生教育と診療所への支援を行うことが決定した。 —配給に必要な食糧3,000トンのうち、957トンカナダ政府から調達し、5月中旬までに現地に輸送した。 —5月中には第1回目食糧配給のための登録を終え6月初旬には配給を開始する。 —その後の調査により、同地域は85年以来雨不足が続くJVCスタッフがマーシャのコレブ地区で見てきたどの状況よりも深刻化していることがわかった。 ●総合的復興促進(マーシャ村) 内戦のため昨年11月より中断している。 再開が待たれる。	日本政府(ODA) CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC、東京グリーン・ウォーク、西本願寺、チャリティ・サイクル、Tree for lifeの会、中部善意銀行、毎日新聞社会文化事業団JVCカレンダーメサイアコンサート エチオピア救援バザー	山田 盛、江原浩昭、 江原広美、田尻真由美、 寿賀一仁、中野周二、イ エットベルク、ソロモン、 パレタ、ダニエル、エシ ャター、トーマス、シュ クル、アリ、アビエ

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲトー郡) ハルバ・キャンプ (ゲトー部)	●農業による自立促進 UNHCR による難民の再登録の結果は、当初の予想を裏切りエチオピアへの自主帰還希望が20%で、実に難民の80%がソマリア国内に再定住することを望んだ。JVCの農場で自立の道を模索していた難民もほとんどがソマリアに留まることを選択した。彼らにとって10年も離れてしまった故郷よりも、生活の道が開けつつあるソマリアが既に安住の地になってきたのであろうか。農業による自立というJVCの目標が、不十分とはいえ実現しつつある。	日本政府(ODA) UNHCR, 仏国土をつくら う会 メサイアコンサ ート	磯田厚子, シアッド, トハボ, アオキ, アブディナサル, ヒレ, ラシッド
ジャラクシ・ キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 1 農場当たりの面積がルークに比べて広いジャラクシの農場は、土地が比較的肥え、かんがいに適した地形であることなどから順調に作付収穫が進みつつある。その一方で単一栽培や地味の良さによる土壌改良への努力不足の懸念がある。植林、輪作、混作などの指導を引き続きしていく。	日本政府(ODA) UNHCR, R.I. Japan	船川秀夫, シュクリ・モハメッド
カンボジア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 国土を復興するため物資の国内輸送を担う公共輸送機関の役割を重視し、部品・設備の供給、自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。運輸省輸送公社が現地の実施機関となり、JVCは自動車整備の教官を派遣した。輸送公社は現在539台のトラックを持ち、内103台が日本製。従来日本製トラックのスベアパーツは全面的にJVCが調達してきたが、現地政府も最近ようやく自分たちで購入できるようになった。当初より訓練を受けてきたのは、ワークショップに配属された輸送公社の職員が中心だが、ほかに孤児などにJVCが奨学金を出し、研修生として受け入れている。現在生徒・スタッフの合計は42名。訓練では、実習を兼ねたトラックの修理と並行して自動車工学などの知識をくり返し教えている。第三期は今年9月に始まるので、それに向けてカリキュラムの整備、カンボジア語の教材・教科書の準備を急いでいる。また、今までの教室は騒音が激しいため、4月より新たに教室棟の建設を開始した。 ●RINE (ライン) プログラム【母子保健活動】 プノンペン郡では①母子保健センターと巡回母子保健活動 ②育児グラフの記入の仕方の講習会 ③郡病院でのお粥・豆乳サービス ④子供の栄養状態の悪い村を選んでの各家庭の生活改善 ⑤再度の小児発達態勢調査などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。プノンペン郡の16の村で巡回母子保健活動を実施し、とりわけ栄養状態の悪いと思われる村を選んで小児発達調査などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。術向上訓練を実施する。プノンペン郡、クササイカンダール郡で働いている医師・助産婦らをインドへ研修に送る。 ●井戸掘り・給水 1990年からこの活動はOXFAM・LWS・JVCと農業者水利局との共同事業となった。7 県とプノンペン市に、今年90本の井戸が掘られる計画である。JVCはこのうち、15本の井戸掘りを援助する。どこに掘るかを定めるために、県の水利局と交渉を始める。	創価学会青年平和会議、モラロ ジーMIRC、立 正佼成会、日産 労連、西本願寺、 善興寺ダーナ基 金、高岡寺族青 年会、毎日新聞 大阪社会事業団、 明るい社会づく り運動神奈川県 協議会、浄土宗 東京教区青年会、 国際保健協力市 民の会(SHARE)、 四日市商業高校、 JVCカレンダー、 全日本仏教青年 会、カリタス・ ジャパン、「第1 回カンボジア・ クラシックコン サート」、真如 苑、「武蔵野市 100周年キャンペ ーン募金」、 日本政府(ODA) 生協ひろしま、 銀座ライオンズ クラブ、メサイ アコンサート	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 「現地の実施・調整機関 と主な担当者」 (運輸省) 国際局 メアス・サメット 自動車輸送公社 タック・カン ワークショップ アム・ディエン ゲット・ソーン カム・ボラ (保健省 母子保健局) アン・サルン医師 カンダール県 保健委員会 ニム・ニェム医師 プノンペン郡 保健事務所 サム・サルン医師 母子保健活動 トウイ・カッ マッ・サモン (農業省 水利局) テ・アヴ・キム 井戸掘り活動 ホック・セタ ソー・サリン

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンブチアを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 ビルマ少数民族難民緊急援助を始める。 カンボジア国境のタイ被災村の井戸修理を続ける。	全国社会福祉協議会 電力総連	ボンピモン、カモン、大石道子、主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 5月18日第一学期が終了し、151名が卒業。ドライビングコース開講のため、教習用道路の建設を始める。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、 スティ・ネップラコン、 井本勝幸、井本美奈
パナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・日本語学習を後から希望してきたベトナム難民を対象に、さらに1クラス増やし、現在クラス数は6クラスになった。生徒数は64名。	R.I.-Japan	竹村雅義、熊沢ゆり、 チャワリット・ドゥワンボム
地域開発 (CD) （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 新学期を迎えるのにあたり児童の家庭訪問、学校訪問を行った。4月24日より今泉の後任として池島が活動に入り、5月23日今泉はタイを離れた。2年間ごくろうさまでした。 ●クロントイ図書館 日本人主婦ボランティアが、かぶとの工作指導を行った。 ●農村開発 水牛銀行の必要な農家を調べたところ21件あった。主婦達が生協を作る資金を得るためバザーを行う。チャブーン県の保育所の建設が終了。	モラロジーMIRC, Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロブチミスト 駿河、JOFIC, からし種、JVC カレンダー メサイアコンサ ート	コメン・スンスマン、 スタラー・ロースワン、 サムルアイ・ジョンヨー クラン、池島千津子
ラオス ヴィエンチャン 県 ボーリー・カ ムサイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 第2回養成コースが4月24日から4カ月間の予定で始まった。このコースは農業改善のための基礎知識を保健衛生等の改善と関連させて教える。2月にはこのコースの準備として、トレーニング講師の東北タイ・スタディー・ツアーを行ったが、本コース期間中には、スタディー・ツアーを受け入れてくれたタイのNGOのATAから農村開発員を招き、講師として参加してもらった。 第1回養成コースの卒業生は、生活改善普及員として出身地域で母子保健を中心とした普及活動を展開している。また地方の普及活動の拠点として計画した三つの母子センターの建設が終了し、各センターでの普及員によるトレーニングが始まろうとしている。	日本政府(ODA) UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団、 新潟国際ボラン ティアセンター、 日産労連、ギャ ラリーイカット、 聖ヨゼフ老人ホ ーム、堺ロータ リー・クラブ、 老人ホーム天寿 荘、難民と地球 の緑を考える会、 グループ・カン ガルー、メサイ アコンサート、 JOCV、JVC カレンダー	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、
日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を
始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によ
って運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま
す。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には
機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京 5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京 3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい)

▶ **みなさまの募金を支えるJVCの活動**—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (5月小計 156,000円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
 - B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (5月小計 120,500円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
 - C. **インドシナ難民救援募金** (5月小計 10,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - D. **カンボジア募金** (5月小計 265,500円) カンボ
ジア国内の復興のために使われます。
 - E. **タイ・スラム募金** (5月小計 28,500円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
 - F. **スラムの子供奨学金・基金** (5月小計 219,500円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - G. **タイ農村募金** (5月小計 23,500円) タイの
農村開発のために使われます。
 - H. **定住難民募金** (5月小計 24,500円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - I. **JVC運営経費募金** (5月小計 87,500円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - J. **ラオス募金** (5月小計 79,500円) ラオス
の婦人の生活向上プログラムのために使われます。
 - K. **無指定募金** (5月小計 1,065,997円)
- ▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京 9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶ JVCのオフィスは、ほかの職場を経験した者にとっては
とてもユニークな所だ。まず、初めてののお客様は置いてあ
るベビー・ベッドに驚く。そして赤ん坊をおんぶしながら
事務をするスタッフが目に入る。(それは私とは限りません)
実は息子は3代目で、なかには1年に1回しか来ないのに
来るたびに赤ん坊がおぶわれている場面に遭遇し、あきれ
て帰るお客様もいる。

たしかに子供がいることで能率の落ちることもあるが、
今ではないかと寂しいといわれるほど生活になじんでしま
った。今回の総会には2代目赤ちゃん4人も出席した。



犬養道子・「みどり一本」募金

東京 0-212497 (5月小計 198名 1,242,666円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使
われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1990年6月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所
〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル 5階
☎03(834) 2388 FAX: 03(835) 0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セン
タービル9F (財)神奈川国際交流協会内
☎045(671) 7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。